

# 同人誌 あごら Agora 第1号

2024年7月7日 ヘルダーリン研究会発行



曼珠道 よだかの血潮  
喉裂けて  
なお歌い舞う 碧の白鳥  
勝又公仁彦



目次

エントウシアスモス

小泉 友美

3

ヘルダーリン覚書(1)

江尻 潔

9

コーラとエン・ソーフ、混沌と自然

津城 寛文・匡徹

12

日常の神秘主義——空・仮・中の三諦を詠む日々

日守 麟伍(津城寛文)

22

ヘルダーリンとジュリアン・グラック

永井 敦子

29

十字架のヨハネのいくつかの詩の私訳(併びに付説)

鶴岡 賀雄

32

ヘルダーリンのギリシャ 鎌田東二のギリシャ 空海とヘルダーリン 鎌田 東二

59

カール・グスタフ・カールス 『プシケ—魂の発展史のために』 深澤 英隆訳

68

表紙写真・短歌

勝又 公仁彦

編集後記

鶴岡賀雄・津城寛文・鎌田東二

付録「ロックンロール神話考」

執筆者紹介 奥付

## エントウシアスモス

小泉友美

忘却の天蓋

琴の彷徨

盲目のキューピッド

渾沌の新生

老いても堂々とした幾本もの巨木が天上へとそびえ、その樹々の端は細かく掌のように裂けながら、この見事な天蓋を支えている。楕円形天蓋内部は、あまりにも複雑な立体形状となつて入り組み、小さな円や正三角形といった単純幾何学図形で渾然一体となり、希望、純粋性、栄光、希望の純白、創造性、魂の不死を示す青、紅、黄、黄金といったすべての色が上へ上へと昇りつめてゆく、この多彩で多様な徴は、柱のいたるところに彫られ、その記憶を留めるために。おどろおどろしい豪華絢爛の錯覚世界。血の凍った呼吸をすることなく、エネジイを取り戻したいかのように、その勇氣、その恥じらい、その熱気に群れてゆく蜂の巣。花から花へと、密かに眠る黄金の蜜を探して、あちらこちらへと飛び交つてゆく。各柱を囲む雲がうねっては、天上から降りそそいで来る一筋の光は黄金の鎖であり、しだいに円く四方に広がって満ち溢れてゆく。中央のカップルドコラムに上から下へと、水の波紋が細かくさざめき、落ちてゆく。光の極みにおいての、まさしく光の中の光。究極の心奥底において揺らぎ、泳がせられる。純白の光に揺れ重なり合つて識られる、ハリエンジュの黄金の鋭いとげとげ、黄金

の木漏れ日を封じた樹脂の苦味は、悔い改めや苦悩といったところの腐敗を阻止するため。ぶんぶんと呻きたてる蜂と鳥の群れ、麗しいような女人の姿が蜃気楼のように薄く、濃く、点々が集められてゆき、ひとりきりの夢想の中、まるでこれから生を捨てゆく魂に気づかされるように。すでに体温を失ってしまった身体の口へと飛び入るこの蜂によって、まるで生の息吹を取り戻すかのように。目、鼻、口、耳のかたちはあまたの傷、皺に埋まり、呼吸の息でかすかに上下し、虚ろに見開かれたままのまなこ。足元には四つの臃げな、うねうねとした長いものの影、三本の尖った先端は湿った土に喰い込むままの影、乱雑な上下の菌型の影。怒り狂ったうながみの影。いずれも光なくどす黒いままに、呻き、吠えたてている。筋肉が劣ろえて、だらしなくさがった両腕に、力なく抱き抱えられたままの、遙か遠くから、今ここに駆け走ってくるものに、丸い純白の翼を刈りとられてしまう。勢いよく生えはじめた、青灰色のくるくるとして艶やかなその巻き毛は、踵に流れ落ちてゆくままに。押されて、倒れるままに、老いたその背中を飛び越えてゆく、小さな両踵に生えた翼。その斜めかられた前髪を風に揺らすまま。

とらえられるのであれば、とらえてみよ、今、この瞬間に。

湧きあがるように、頭上には暗い炎を燃やして、星々の輝きは額に灯る。その陰鬱な示しは、背後に永遠に繰り広げられている太陽、水星、木星、金星の惑星群の運行によって、過去、現在、未来が表現される。細やかな時の刻みとともに、ゆつくりと萌えあがる緑の野は、すでに黄土色の衰えをみせて、あまたの透明な泡から生まれてゆく、小さなかたちの命は、口を開いて言葉を綴るもの、その真偽ははかりしれないでいる。生まれての若さはすでに老いをみせてゆく。深く、どこまでも暗い足元を濡らしてくる水色の氾濫に、不機嫌に眉根に深い皺を寄せながら、すでに痛めてしまった右足をひきずるままに。自由に身動きのとれないことの焦りと苛立ちを覚えて、内から湧いてくる赤黒い暴力と怒りは、竜巻きのように、ぐるぐると回転してゆくなかにその身を投じて

しまった。

シからシには、土星がめぐり、ドからドには月がめぐり、レからレには水星がめぐり、ミからミには金星がめぐり、ファからファには太陽が輝いている。これらの垣星は天の下にあってまた、天と異なる動きをみせて後退してゆくことの天の支配はまぬがれない。この長く繁栄を極めている城の塔に、微睡みから少しづつ覚めている老いの身体から皺が伸び、肌に弾力が溢れてきていた。光薄れる夕べとなり、夕陽の没んでゆく山脈の彼方から、半円の月の輝きのさしそめ、星々も波間に行き交えば、天上の輝きに映え、やがて星影の移るがままに、潮の流れも変わりゆき、考えてみればこのすべての惑星、太陽が軌道を進むにつれて、凄まじい音をたてて、進んでゆく。何気なくおかれた右掌から奏でられるのは、とても哀しげで重々しい音色で、星々の輪が波のように押し寄せつつ、横へと上下になめらかに動いてゆき、この音は作り出されて、かくしてまた、高い音が低い音といろいろに混ぜられてゆき、まこと、これほどの勢いのある、あまた勢い打ち進められて、おのずと端なる音の一方が高ければ、もう一方は低きものとなって押し寄せてくる。右の掌の演奏によつて二本の弦はぶちんと音をたてて切れてしまい、傷から流れてくる真紅の血のほとばしりは、内面から湧きあがってくる、いのちをよみがえらせる。二つの掌を、表裏重ね合わせて演奏すると、さらに二本の弦がたちきれても、かつ、音色は止むことなく、四分の三の四度、三分の二の五度の音程、九分の八の音の天上の音楽は、上昇し下降が繰り返される音階で構成されてゆく。左掌のみの演奏は、薄紅色の湯気を発生させるまま、雲の形を彩どりながら、豊かな長い髪をたゆませる女性の姿を浮かびあがらせて、鳩と鷺が豎の両脇に育ち、月桂樹に留まって、その常緑の枝は永遠のいのちを約束する。両掌を手放して、琴が足元に落下してゆく時に奏でられるのは、哀しみのリディア調であり、お互いに矛盾して対立するあらゆる諸物は、あまりに雑然として、生と死、湿と暖が混淆融和して、相反撥するも協和して、窮玄なる美の調和が生起してゆく。何処までいったとして、如何なる途をたどったとしても、この音

階の限界に行きつけない。その道に果てしなく深く、落ちてゆくのみ。真つ二つに裂けた琴のかわりに、掌に落ちてきたのは、遠く波の穂を踏んで海を渡ってきた、非時の香の木の実。この陽光と豊穡の地に。暖かなオレンジ色は、二つの種子をはじけだして、二つの翼を背に生やした愛の天使は盲目のままこの世にこうして誕生した。乱れるままのくるくるの巻き毛の頭上には、真紅の血が滴るような薔薇の冠。目にも鮮やかな緑々とした庭で、今、誕生というまどろみから覚めた。片手には、真つ二つに見事に折れた琴が握られており、空いたもう一方の掌には二本の純白の矢を持ち、銅と象牙の矢先からは、薫り高い雫がしたたるままに。純白の矢は、美、簡潔さ、率直さ、同情心、真つ黒な矢は、醜さ、恥、絶望、奇妙さを表現している。美とは視線を通して生まれる光。愛は主張する。われは盲目なり。愛はおのれを盲目にする。布で覆われた両眼の外に覗れない透きとおった瞳は、精神的な愛に通じ、その反対の肉体的な愛は品位をおとしめる。幾度も幾度も、その矢先を心臓に突き刺して、ついには奥へと突き通してしまった。一気に矢を引き抜くと、心臓もすべて一緒に外へと引き出されてしまい、前方から愛の矢から放たれた愛の炎によって全身は包まれて、炎上されてしまった。その苦痛はあまりに激しく、痛い。あまりの苦痛に大きな呻き声をあげてしまうと、なんとも甘美なカオスが広がってゆく。いつの間にか、二つに折れた琴は、見事に一つの曲線をなす弓を形どり、愛の矢が放たれて、見事な光の動きはすべての魂を燃えあがらせる。恍然たる美に包まれながら、愛の嘆きはいささかも消滅せずに、ますます燃えさかる焦燥感に駆られるのは、まさしく天上からの恩寵である。立ち並ぶ、一切の神像を潔く、捨てさって、後を決って振りかえらずに進んでゆけば、灰色の風は花々を咲かせる吐息となり、すべての万物がすくすくと育つ天上ゆく。この密やかな魂の堂奥においての、不思議な秘事が成立してゆくこと、調和は乱れに乱れて、人里離れた洞穴に滴り落ちるままの清水、鮮黄なる蜂蜜の甘さは無花果の甘き果汁に絡み合って、様々なる草花がその華を競い合っていて、芳しく立ち昇る香煙のけむる中、美にとり憑かれた。左奥の泉は、戦士した兵士たちの指から咲き誇るカー



ネシヨンの花、溺死したナルキツシスの紅い唇からは水仙の花、随分と後方には光輝く太陽神に憧れているクリユテイエが光輪に焦がされてゆく向日葵と、同じく、太陽神にあんなにも愛されて、嫉妬をかってその胸に矢を放たれつ殺されたヒアキントスが、紫色のヒヤシンスとして咲き誇っている。花の女神フローラは春風ゼファに抱かれて、満開の美女となり、その掌には、豊穰を象徴するオレンジがくるくるとまわっている。三人一組の恵みの女神の円舞は、天から地、人間へと、そしてまた天へと還る愛の循環、美、愛と喜びがまたひと回りして、円舞したことの証。受肉という恩恵の瞬間において、気高く均衡を保持して腰まわりを優雅にひねり、両掌を見事に開いて美、愛と喜びの舞を踊る。衣を艶やかに彩どる花々は紅い薔薇、矢車草、紫色の堇、勢いよく放たれた日かの矢は、遠く、飛び散る火花を一気に目の前に咲かせてゆく。盲目のキューピッドは見えない目を大きく開かせてゆき、煌々たる光の波に、いまや泳いでいる。光輝なる日光に照らされて、突如としてつくられたこの太陽にまで登る道は、一本の太い垂直線によって表現されて、下から上へと登るこの光を凝視することで、いまや両眼は損なわれてゆくまま。天空には、双頭白馬、二頭立ての馬車、無色、無形、不可触の天外へと、天の彼方なるこの場所。少しづつ、すべての形が崩れてゆき、雑然と無差別に、相反発していたものは協和し、異なる種から万物が相剋から生まれてゆく。魂はすべて顔となり、すべて目となり、すべて唇、そして大きな一つの掌。まったく自分を忘れて、はじめて声を聴いた時に、その場に引き合わされて、また強く引き離された人々は、次々に涙を流している。わたし達の想い、情感、感覚、哀しみ、喜び、痛みのすべては、ばらばらなものが一つの形をつくってゆき、結局は最後に分裂してゆく。鷹の翼は折れたまま、その鋭い嘴で土をほじくる返し、蝙蝠、鴉、蜻蛉、蜉蝣、蝶は、山川草木の全宇宙を鳴り響かせる永遠の調和の内に、天上から澄んでいる気が戻り、凝った地は濁っている気として浮上する。無骨な野生、いままですべての明るみ、大地の紛糾が、裂けた深淵に共存してゆき、あらかじめ自らを開きつつ、一切を呑み込んでゆくところの開かれたもの。真っ白な五弁の

銀梅花はすべての中央にあって、月桂樹はこの混沌において、声をあげずに語りかけてくる。気がつくくと、老人はまどろみから若がり、腕に抱えている琴は美しい女として変化している。愛の矢が心に刺さったままの女は、過去に七人の夫に嫁いだが、その度、魂を奪われてしまった。そして心に深い哀しみを覚えて、嘆きに嘆いて悲しみながらも、その嘆きの痛みに身を任せるままに、再び、深い眠りに落ちていった。この美しい女を両腕にかき寄せて、葛藤を髪に飾って、馬に乗って駆け出していたのである。

わたしに何の喜びがありましたでしょうか。わたしは目が見えず、天の光を見ることができないのです。生きていても、もう死人の世界にいるようなものです。思い出すこともできません。人の声は聞こえますが、姿は見えませんが。その声も誰のものかもわかりません。どこか遠くに行かなくてはならないと思うのですが、其処がどこなのかもわかりません。どうぞ、私を連れて道案内をしていただけませんか。

すべての音階、すべての詩、すべての声が響き合って、訪れるのは、あんなにも傷ついた茨の冠であり、一、全がようやく祭礼して成り立つなか、老人も、愛の天使も、麗しい女、白馬も琴も、声をあげて集まってくる群衆の影も、次々に靈感を受けて、涙を流している。すべての想い、心、感覚、哀しみ、痛み、喜びというばらばらなものから一つの形となってゆく、もう振り返ることも、凝視することも出来ないような強い衝撃の中で、まったく目の見えなくなった瞬間に、なんと恐れおおい聖なる受肉が、こうして一勢に口にするので、おこなわれているという神秘。食されることで、口から入った糧は、吐き出される息としてのちをつないでゆく。すべてが充たされるこの新生には、一切の対立は無く、ただ充溢されてゆくのみか、否か。



# ヘルダリン覚書(1)

江尻 潔

神は近くにあつて捉えがたい。しかし、危険のあるところ、救いの力もまた育つ。(「バトモス」)

ヘルダリンは神を捉えることが危険であることを知っていた。しかし、同時に「救いの力」も育つことも知っている。神の力は強くとても人の手に負えない。神は雷として到来する。それが神からの「しるし」(合図)なのだ。さらにそこには「怒り」も込められている。『しるし』が地に訪れたのに、しだいにそれが、人々に見失われ、忘れ去られてしまった」ことに対して「神の怒りは燃え上がる」(「唯一者」第二稿)。さらに神の怒りは「限度を超えて、人間の手が生命に「挑戦」し、「神的な意志を、人間のたくらみが破っているため」(同前)いや増す。まず神の怒りを鎮めなくてはならない。歌にはそのはたらきがある。そもそも、「しるし」(合図)とは「天のことば」(「アルプスの麓で歌う」)であり、これを人が受け止めることにより、歌が、さらには言語が成就する。それを神は望んでいる。人が言語により歌うことを神は嘉みし給う。神は人に「ことば」を授けたいのだ。その意に応えるのが詩人である。

神の「しるし」はなにも雷ばかりではない。「天のことば」はさまざまである。そこには「太古のままに」語る「森のことば」もある。ヘルダリンはそれを「解き明かし、歌おうと思う」(「アルプスの麓で歌う」)。

だが、いったいどうやって「天のことば」を人のことばとして歌うことができるのか。「天のことば」は自然の響きであり、天に属している。それを死すべき者である詩人が言語として捉え、人間界にもたらす。ここには奇

跡的な技がはたらいっている。

1805年に成立したという「ピンドロス断片」の「海豚について」に関する注釈は、自然の「ことば」を、いかに人間の言語に変換するかというヘルダリンの思索を示唆している。以下長いが全文を引用する。

### 「海豚について」

それを、波なき海の深みで

笛の音が愛らしくうごかした

ムーサたちの日和、それは、花々のうえに、黄金なす花々の輝きのうえに、綿のような雲がかかるとき、自然の歌が響きわたる。生きとし生けるものは、己の音を、自身の信義を、おのおのの関連のあり方を告げる。そのあり方の違いのみが、そのとき自然における分離をもたらす。それゆえ、欲求の強調、あるいは別の面では言語でもなく、むしろ、すべては歌であり、純粹な声なのだ。波なき海こそ、敏捷な魚がトリトンの笛(法螺貝)の音を、成長の反響を、柔らかな海藻のなかで感じる場なのである。

ヘルダリンは「天のことば」を「自然の歌(声)」として捉える。「生きとし生けるものは自らの音を」発している。これは生の振動による響きである。命は絶えず震えている。それが、それぞれの響きとなって、「そのあり方の違い」となって表れる。それは「歌であり、純粹な声」なのである。私はここに「生きとし生けるもの、いずれか歌をよまざりける」という「古今和歌集仮名序」の世界観と同質の思考を読み取る。だから私はヘルダリンが好

きだ。

ただ注意しなくてはならないことは「天のことば」は「言語でもなく、むしろ、すべては歌であり、純粋な声」だという指摘である。あたり前のことだが、人のことばではないのだ。これをいかにして人のことばに移し替えるか。ここで機能するのが「笛の音」である。笛はトリトンが奏するが、人もまた吹くことができる。「笛の音」は自然の「純粋な声」（ここでは「敏捷な魚の成長」）の「反響」なのだ。ここにおいて「天のことば」が、笛という人為の響きに、つまり人の「歌」に置き換えられる。笛の音を人の声と読み替えてもよい。自然の声が人の声としてごまます。これこそ言語の初発のありさまなのである。

こうして「天のことば」が人に明け渡され「言語」となる。さらに、注意したいことは、そもそも言語の初発は会話や概念構築に終始する日常的なものではなかったことだ。あくまでも「詩のことば」なのである。つまり「天のことば」の響きと余韻をまとった「人のことば」なのである。これはとても重要なことだと思う。いかにして天の響きを人のことばに宿らせるか、天なるものはそれを望んでいる。だからこそ「救いの力」がはたらく。この力は神との「距離」として顕れる。かのものとの距離がなければ人はたちどころに狂気に陥る。言語はまさに距離を保つものなのだ。なぜならばそれは本質的には「反響」（エコー）だからだ。

※ヘルダリンの詩の翻訳については手塚富雄、浅井真男訳『ヘルダーリン全集第二巻 詩II』河出書房新社 1967年を参照しました。また、「ピンドロス断片」を翻訳するにあたり、武田竜也訳 ヘルダーリン『省察』論創社 2003年を参照しました。

# コーラとエン・ソーフ、混沌と自然

津城 寛文・匡徹

## 根源語

タイトルの四つの根源語はどれも、その他の類語と同様、話者や文脈によって、濃淡の価値を担わされる言葉である。「ヘルダーリン」の名を冠した広場から、断片的に聞こえてくる言葉を、辻占のように切りとって、根源語の示すところを考えてみたい。

ヘルダーリンの詩『あたかも祭りの日の……』を論じたハイデッガーは、神々に先立つ「混沌」と「自然」を根源語として、神々は自然から生まれ、自然は混沌から生み出される、等々と繰り返し返している。

他方、ゲルシヨム・ショールムは、ユダヤ神秘主義を論じた大著において、人格的な「生きた神」であるヤーヴェと、有限な人間には思いも及ばない「隠れたる神（エン・ソーフ）」とを随所で対比し、あるところでは後者を、プラトンの「コーラ」と等置している。

プラトンの「コーラ」とユダヤ神秘主義の「エン・ソーフ」、ハイデッガーの「混沌」と「自然」を並べてみると、宇宙創造以前のなにかの「開示」の衝撃が、四つの根源語によって、さまざまに描写されている。

ハイデッガーやショールムとは、関心の焦点というか、方向が外れているジャック・デリダも、語りえないものとしての「コーラ」について、どう語りえないのか、いつものように、手を変え品を変えて語っている。

ハイデッガーの本領が哲学であり、ショールムの本領は宗教であったのに対して、脱構築の旗手であったデリダの本領は政治である。デリダがコーラに言及しつつ、中心部に遡及するよりは、そこから離れていくのは、コ

ーラは宇宙以前、世界以前、人間以前、人間が構築した社会集団以前、したがって政治以前だからである。「宗教」や「神秘」でも、教義や信仰、制度や建築など、歴史的に構築されたものは脱構築できるが、構築されていないものは、そもそも脱構築できない。

なお、マルティン・ブーバーの根源語、「我・汝」は、「生きた神」に引き寄せられ、したがって宇宙創造「以前」の「隠れた神」は焦点から外れ、取って宇宙創造「以後」の「人格的」「対話的」な属性が強調されたものである。「神は人格でもある」とは、その限定の宣言である。

## ユダヤ神秘主義

有限な人間の射程を超えた領域・次元は、「永遠の哲学」的な神秘思想では、ギリシア思想では「イデア（のイデア）」、ユダヤ思想では「エン・ソーフ」（無限なもの）、のちのキリスト教用語では「隠れた神」、東洋思想では「無」「空」などと呼ばれた。この領域から元素・原理が「流出」「展開」してきて、「道」「法」「掟」にしたがつて宇宙世界が形をとり、人間と接点をもってくるのも、公約数的な思想である。

ユダヤ神秘主義に特徴的なのは、このエン・ソーフが自己顕現し、宇宙に流出・展開し、さらに地上に反映・現象してくるプロセスのどこかにおいて、「ユダヤ民族」が重要な役割を担う、という図式である。「無限」「超越」である神と、有限の宇宙世界、その中の微小な人類、とくにユダヤ民族の歴史が、重ねて考えられるのは、有限なものが無限なものへ極大化されているとも、あるいは逆に、無限が有限に矮小化されている、とも言える。

シヨールームは、ユダヤ神秘主義を論じるに当たり、冒頭で、「既成宗教の一定の固着したかたちから一種の普遍的宗教へ」、いわば「化学的に純粋な神秘主義」の「一般的特質」を考えるとという試みに言及している。「しかし

……一般的抽象化にとどまることは実りが無い」として、その試みはただちに却下される。ユダヤ神秘主義とは「一定の具体的な歴史現象の一総体」と考えるからである。「永遠の哲学」は、こうして固有名詞をもった哲学になる(シヨレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985)。

シヨレムがユダヤ神秘主義を論じた大部のテクストから、華麗な衣装・意匠(ヘブライ語、西洋(古典)語の術語)を除去し、歴史的な展開やさまざまな人物・流派の差異も捨象して、遠目に見ると、私の目にはつぎのようなテーマが浮き彫りになってくる。単純化して、他界の極限である無、無からの創造、宇宙の領域、地上の歴史としてのユダヤ民族、の四つに分けて整理しよう。

一つめ。他界的なものの極限(と想定される)「無」「とらえがたきもの」「無限なもの」「エン・ソーフ」は、やむをえず神という言葉を用いれば「隠れた神」としか言えないものである。シヨレムはこれを、プラトンの「コーラ」と等値した。この「非人格的な根元という神智学的な設定」は、「聖書的神概念の人格主義的な基礎」を揺るがせる。じつさい、「隠れた神」と「生きた神」の二つの神観は、グノーシス派につながる「二元論的帰結」と、「両者の統一」として把握される立場とのあいだで、ずっと揺らいできた。

二つめ。二元論にせよ統一説にせよ、「隠れた神」が「生きた神」になるのは、「豊かな無」からの「創造」以後である。第一歩は、「神の潜勢力」が「無」から顕現する段階であり、新プラトン主義で有名な「流出」の象徴に言及される。「流出」は一般に、この宇宙存在に関してただ一度だけと考えられたり、創造後もつねに「干潮と満潮」「吸排気」のように相互作用するものと説かれたりする。ここまでは、究極を説く思想として、「永遠の哲学」に対応する。

三つめ。次の段階は、ユダヤ思想に特徴的な「神智学」で、「セフィロース」として説かれる。これは、「神から流出して神自身へ還流する十の段階」「領域」「数」「基本的属性」である。「流出左派」として、「聖ならざる」



セフィロースを説くグノーシス的な異端もあったが、主流はこれを「聖なる」「一個の神秘的有機体」とみなす。またユダヤ教における言葉、つまり「聖なる言語ヘブライ語」は、神の言葉として「神秘的な価値」をもつ「象徴体」であり、律法（ハラーハ）やトーラーの実行は「秘儀的行為」であるという。

四つめ。視野が宇宙全体から、地上の歴史に急速に絞られると、いわば起源神話の「歴史学」となり、そこではユダヤ民族が前景化する。神秘主義は「本性上……非社会的」でありながら、現実のユダヤ教・ユダヤ史のなかで「共同社会のための形成力」となってきた。「この歴史という問題」が、ユダヤという「特殊枠」の理解の礎石となり、あるいは躓きの石ともなる。

三つめの「神智学」と四つめの「歴史学」は、巧拙、精粗はあれ、ほとんどの神話にみられるもので、日本神話では、天御中主神から皇祖神、天孫降臨、神武東征あたりまで対応する。

## ヘルダーリンの詩

ヘルダーリンの詩『あたかも祭りの日の……』は、ヨーロッパ思想や芸術の共通の土壌として、ユダヤ教、キリスト教、またギリシア神話が背景にある。この詩を中心に据えた、ハイデッガーのヘルダーリン論に、つぎのような表現が繰り返してでくる。これを、プラトンの「コーラ」あるいはユダヤ神秘主義の「エン・ソーフ」と重ねてみると、宇宙創造以前のなものかが、「自然」「混沌」「深淵」等々という主語で指示され、その「裂開」と「開示」の衝撃が、さまざまに解釈されているものと読める（ハイデッガー『ヘルダーリンの詩の解明』『ハイデッガー選集3』理想社、1962 傍線は引用者）。

「自然は、不可思議に遍在せるものとして、予めすでにあらゆる現実的なものに明るみを贈るがゆえに、「諸々の時間」よりも時熟しており、その明るみの開かれたものななかへと始めて現実的なものである一切が現われることができるのである。……自然はまた神々にも先んじている。……神々「を超えて」いる」(同書、89頁)

「ヘルダーリンはこの節でまた「混沌カオス」を「聖なる」と呼んでいる……聖なるものは自然の本質である」(同書、90頁)

「しかしながら自然は実に「聖なる混沌カオス」から生み出され」ている。……カオスとは先ず第一に巨大な口を開けているもの、裂けた深淵、予め自らを開きつつ一切を呑み込んでいるところの開かれたものを意味するのである。深淵は区別されたものや定礎されたもののためにあらゆる足場を拒む。……いかなるものもこの裂開に先行せず、たえずただそれに入り込むだけである。」(同書、95頁)

「遍在するもの」及び「一切を創るもの」は今や「一切をいのちあらしめる」自然といわれる。……しかし力は神々に由来するものではなく、神々がこれらの力によって存在する。」(同書、99頁)

そしてこれら、存在以前の、無限定の「自然」「混沌」「深淵」の描写や、有限な形や人格をもった「神々」の配置に続いて、「詩人(たち)」と「民族」「共同の精神」がつぎのように説かれるとき、無限と有限の接続が起ることになる。

「ただ詩人たちだけが遍在する自然によって軽やかに抱かれているときに、どのようにしてそれぞれ「民族」は聖なるものの現在に立たねばならないのであろうか。」(同書、99頁)

「ともに目覚める詩人たちにとって、原初的なものの豊かさは彼等の言葉に殆ど云うべからざる意味の充溢を贈る。……震撼が目覚める自然の最古の深みから出て来るゆえに、詩人たちはこの自然によって軽やかに抱かれているがゆえに……「目覚める自然」、「震撼」は現在している。……それは精神としてたえず「共同の精神」である。」（同書、101頁）

宗教思想として問題になるのは、無限なる神と有限なる神（々）の断絶／接続である。それは、シヨールムにおいては、エン・ソーフとヤーヴェの関係、ハイデッガーにおいては、「自然」「混沌」「深淵」と神々の関係がどのようなものか、という、神格論の課題になる。

他方、無限なる神と有限なる「民族」の直結、あるいは、限定された神（々）を介した間接の接続は、ハイデッガーにおいてもシヨールムにおいても、宗教とナシヨナリズムの関係、つまり広義の政教関係論になる。そしてこれが、政治を主戦場とするデリダの関心の焦点となる。

## 脱構築できないもの

デリダ晩年の『最後のユダヤ人』に収められた二つの講演は、彼自身のユダヤ的出自へのこだわり、つまり、「ユダヤ性ないしユダヤ教への帰属なき帰属」と、「ユダヤ的なもの」に「過剰に同一化すること」への警戒を主題としつつ、個人性と集団性、神の超越性と人格性、さらには、超越の極限としての無限的な「コーラ」にまで言及している。

「ユダヤ人であること」をめぐる、錯綜した、しかし率直な告白が、デリダのような人にとっても「挑戦」的な課題であったことは、「昨日もなお……」「脱構築」的な演説を行なうべきではないかと自問して「いた、と告白しているとおりである。しかし、「より好ましいと思われるのは、いつそう生の形で私自身を開陳すること」だと思いなおし、「脱構築」のすり替えを行わず、「最後のユダヤ人」というタイトルどおり、ユダヤ人としての自らの問題を、「生の形で」真正面から展開している（デリダ『最後のユダヤ人』未来社、2016）。

デリダは「神」と「ユダヤ」という、未だ「知るにいたっていない」二つの語のうち、「神」については「ここでは……直接語りなおすことはしない」と脇におく。ことさらに断るまでもなく、「神」についてデリダは、「直接」には一言も語れないだろう。他方「ユダヤ」については、「どこで、いつ、どのようにして」自分に対して現われたか、学校での個人的な経験を語ったあと、ユダヤ民族の特性を、つぎのように論じる。

ユダヤ人には、「根源的に負債を負い、責任を担い、有罪である」という「普遍的な責任」と「その見張り番」としての「選びないし反一選び」がある。この、「ユダヤ人がユダヤ的であればあるほど……人間の責任の普遍性をいっそう代表するようになる」という「範例主義」の選びの「誘惑」は、ユダヤ的ナシヨナリズムだけでなく、ナシヨナリズム一般にも作用している。ナシヨナリズムはすべて、「普遍主義的な範例主義への……歴史的な責任への使命」を要求してきたからである。

「ユダヤ人」（一般に特殊な差異をもった民族集団）であることと、「普遍的な構造をもった……人間存在」であることという、対立し連続し、相互浸透して語られるようなペア（その他）のあいだを行き来し、明示的な断りなしに文脈を転換するゆえに、随所で「脱構築」を起こしうる。そこでは、小さな共同体から国家や世界全体まで、さまざまな次元の「法」「掟」が交錯することになるし、そうしようと思えば、この世界以前、この宇宙以前、さらには存在そのもの以前までを射程に入れて、同様に論じることができる。

「この世界以前」「この宇宙以前」「存在そのもの以前」と私がいうのは、ユダヤ教・ユダヤ十二部族の始まりとなる「律法を与えられたという歴史……遺産」に関して、デリダが「コーラ」というギリシア語を用いて、つぎのように述べていることとかかわっている。この歴史的経験は、「掟と正義と法・権利の関係」について、「メシアニズムなきメシア性」について、「国民国家的市民権を超えた来るべき民主主義」について、そして何よりも「とりわけ、歴史に先立ちあらゆる人類一神一学的啓示の出来事に場を（与えることなく）与える場としてのコーラ」についての、「還元不可能な論理を構成している」という。ユダヤ的なものと異質に見える「コーラというギリシア語」が示すもの、「否定神学のさらに彼方で場を開く」というこの無人間的、無神学的な場」にこそ、「啓示や選びをめぐるあらゆる教義から解き放たれる条件がある」と同時に、「この解き放ちこそ、啓示ないし選びの内容そのもの」として解釈できる。それは、「ユダヤ人たちの神……この神は＜場＞でもある」からである、という。歴史以前、人間以前、神以前が射程に入ってきたうえで、かつ「ダヤ人たちの神……は＜場＞でもある」というとき、無限定のコーラは、ユダヤ的回路に縮減してしまうようである。

デリダはまた、『信と知——たんなる理性の限界における「宗教」の二源泉』（未来社、2016）において、カントの『たんなる理性の限界内における宗教』を材料に、宗教の起源を「限界」の外に問いつめようとした。ここでの問いは、「一巻の＜旧約一新約聖書＞でもあるような一つの＜世界＞」は、「単なる理性」にとつて「一つの限界」なのか、あるいは「別の限界へと還元される可能性」があるのだろうか、というものである。

この難問を「最も抽象的な形式」で問いなおせば、対立するのは、「啓示＝開示可能性（Offenbarkeit）」は、啓示＝開示（Offenbarung）よりももつと根源的なものであり、それゆえすべて宗教というものから独立している」つまり「イデアとしての啓示」がある、という立場と、「信仰者や神学者ならばおそらくそう言うだろう」ように、「啓示＝開示」という出来事が「啓示可能性そのものを……啓示する」つまり「その点にこそ起源の場があ

る」という立場、この二つである。

デリダはさらに、「ある第三の場」に向かう。それは、「無秩序的≡非起源的」「砂漠のなかの砂漠」「極度の抽象作用」「religare (結びつけること、再び結ぶこと)」という「絆≡紐帯」よりも以前「原・始原的なものよりもさらにそれ以前のかなにありえたかもしれない場」「人間同士の絆、あるいは人間と神の神性とのあいだの絆以前のこと」等々の「場」である。この「砂漠の抽象作用」とは、「そこから逃れているものいつさいに場を与え、生じさせる可能性」があり、その結果として、「起源の二重性」が生まれるものであり、これは一方で「メシア的なもの」と呼ばれ、他方で「コーラ」と呼ばれるものであるという。

「メシア的なもの」は「正義の到来」「他者による決定」としての「歴史を開く可能性」がある。こうした「メシア的なものの次元」「抽象的なメシア性」は、いかなる「メシア主義≡メシア待望思想」にも依存せず、いかなる「限定された啓示」にも先立ち、したがって当然「いかなるアブラハム由来の諸宗教」にも限定されない。こういう「砂漠のなかの砂漠の好運」は、伝統の根柢を抜き去り、無神学化し、抽象することによって、ある普遍的合理性を解放し、「宗教」について「合理的」な普遍的言述を行なうことを可能にしてくれる。これはシヨレムが比較宗教による「一般的抽象化」と呼んで批判した、通宗教的な次元の強調である。

「コーラ (Khora)」という名については、そのような比較や抽象の手がかりすらない起源・源泉として、論じられる。プラトン『ティマイオス』のなかで言及されたコーラは、「場そのもの」「絶対的外在性の場」であり、「間隔化」を可能にすることであり、「間が開くこと」は「いかなる神学的、存在論的、人間学的審級によっても支配されてしまうことがなく、時代も歴史もない。むしろ「それらのプロセスすべては、コーラの抽象を前提」とする。コーラはなにものでもなく、存在者ではなく、現前するものでもなく、ダーザイン (現存在) がその不安のうちで、存在の問いへと開かれるようなく無くでもなく、「存在を超えた彼方」として告げることもできず、



プロセスすべてに対して「絶対に動かされないもの、異質なものの」のままとどまる、等々と敷衍される。

しかし他方で、この宗教の彼方を示す極限の議論が、デリダの本領である歴史や政治の卑近な課題に、直結される。「主権国家」「市民―主体」「公共空間と私的空間」などの地上的な概念は、ある一定の宗教的根元から派生したものを受け継いでいて、「私たちの民主主義の理念が、いまなお宗教的なものを伴っている」からである。

「宗教とは応答である」という命題について、「責任⇨応答」には「誓いによる信」がなければならず、この「宣誓した約束という企て」は、「神を証人に立てる」必要があるゆえに、「神」が「不在の現前……不在であるもの」として呼び出される」からである。

## 構築以前の世界

このような、人間によって呼び出される「不在の神」「投射されたもの」についてはどのようにでも語りえて、したがって、自他によって語られたことはどのようにでも脱構築できる。

しかし、「砂漠のなかの砂漠」や「コーラ」、「極度の抽象作用」や「原・始原的なものよりもさらにそれ以前のもの」なにかでありえたかもしれない場」といった、もともと構築される以前のものについては、デリダのような脱構築主義者は、非・構築的に、引用を重ねるしかない。「コーラ」「エン・ソーフ」「混沌」「自然」といった根源語について、既述の言い回しを引用するだけという、二流の学者と同じような二番煎じしかできないのは、超一流をもって自任する人にとっては不格好なことである。せめて「最後の脱構築」を謙虚に告白して、遠い彼方の根源語の世界に憧れることくらいは、できたのではないだろうか。

すぐれた神秘家たちや詩人たち、その名に値する思想家たちは、そうしてきたのである。

# 日常の神秘主義——空・仮・中の三諦を詠む日々

日守 麟伍(津城寛文)

## 1 芸術と宗教のあいだ

「歌道は即ち仏道」「和歌は即ち真言・ダラニ」などは、詩歌(〇芸術〇行為一般)と宗教の密接な関係を宣言したもので、唱えたのは、歌人にして仏僧の知識人たちであった。そのはつきりした自覚の発端となったのは、公家政治から武家政治への激動の時代を目撃した、最晩年の藤原俊成である。

式子内親王の求めに応じて著述された『古来風体抄』(1197初撰、1201再撰)は、冒頭で「和歌の起り」や「古今集の序」に短く言及したあと、話題を転じて、「天台止観」の「空・仮・中の三諦」に説き及んでいる(藤原俊成『古来風体抄』『日本古典文学全集』50 歌論集』小学館、1975、274～275、277～278)。「歌道〓仏道」論の核心は、引用するとわずか四百字ほどの分量になる。

「しかるに、かの天台止観と申す文のはじめのことばに、「止観の明静なること、前代も未だ聞かず」と……うち聞くより、ことの深さも限りなく、奥の義も推し量られて、尊くいみじく聞ゆるやうに、この歌の善き、悪しき、深き心を知らむことも、ことばを以て述べ難きを、これによそへてぞ同じく思ひやるべき事なりける」

「浮言綺語の戯れには似たれども、ことの深き旨も頭はれ、これを縁として仏の道にも通はさんため、かつは煩惱即ち菩提なるが故に……歌の深き道を申すも、空・仮・中の三諦に似たるによりて、通はして記し申

すなり」

「歌の姿心、申し述べ難しとても、ことに仏道に通はし、法文に寄せて申しなすことなり」

「この道に心を入れん人は、万世の春、千歳の秋の後は、皆この倭歌の深き義によりて、法文の無尽なるを悟り、往生極樂の縁を結び、普賢の願海に入りて、この詠歌のことばを翻して、仏を讃め奉り、法を聞きてあまねく十方の仏土に往詣し、まづは娑婆の衆生を引導せんとなり」

フランス文学者の栗田勇はかつて、この三諦の思想によって、和歌の「形而上学的なストラクチャー」が定式化されたことを、現代的語彙でわかりやすく語りなおした。「三夕の歌」の一つ、西行の有名な作品を例とすれば、「鴨立つ沢」という「一瞬のうちに消えてゆくフェノメノン」|| 「仮」が、「秋の夕暮れ」|| 「空」のなかで羽ばたくことで、「一挙に「中」という超越的な存在をあらためて自覚させ、呼び醒ます」となる（栗田勇『西行から最澄へ——日本文化と仏教思想』岩波書店、1999）。

このように、上の句「心なき身にもあはれは知られけり」を「中」の自覚と捉えると、西行の和歌は、字面の言葉としても、三諦の要素をすべて含んでいる。しかし俊成の歌論は、三諦を言葉で表わすというより、「諸法無我」|| 「諸法実相」|| 「色即是空・空即是色」、「煩惱即菩提」「悉有仏性」等々はすでに自明の仏法（真理）として、それを背景に、「仮」の世界を、「仮の世」ながら、「深い心」つまり実感をもって、言葉で魅力的に詠みあげることである。したがって、具体的な言葉はもちろん、姿や心、情調や内容も、恋歌や四季の歌、叙景歌や雑歌と区別できないことがありうる。

「釈教歌」と「神祇歌」の巻がたてられたのは、俊成が選進した勅撰集『千載和歌集』（1187）からである。この釈教歌の巻には、一見してほかの巻と区別できないものも多い。たとえばつぎの歌は、「法華経の我等長夜修習

空法の心をよめる」などの詞書によって、仏教的な真理実践の歌として読むべきことが明示されているわけである。

「長き夜も むなしきものと 知りぬれば 早く明けぬる 心地こそすれ」

仏教との関連では、そのほかにも、発心のきっかけになる歌、輪廻からの逃れがたさを痛切に詠む歌などがある（津城寛文『深層文化から頂点文化まで』ネクバブ・オーサーズプレス、2021、151～154）。

宗教体験は、天地以前、存在以前、非存在、無、無以前、「無以前」以前、等々に達する（と自己評価する、あるいは外部評価される）頂点的な神秘体験から、価値の所在が社会から自然に移ったり、地上から他界に移ったりして、それまでの価値が溶解して、別の価値に覚醒するような体験、いわゆる発心や回心の体験、また誰の目にも見えやすいものとして、ある宗派から別の宗派への改宗体験もある。

歌人は宗教的修行の専門家ではないが、和歌を空・仮・中の三諦に通わずと述べた俊成は、和歌を専心して詠むことによって、仏道修行をひたむきに実践したと言ってよい。私も、歌人にして信仰者、瞑想や祈りの実践者として、日常を詠む和歌が、そのまま仏道（宗教）に通じる、そのような者でありたいと思う。

## 2 歌道即仏道の日々の実践

歌人や詩人（＝芸術家）には、作品の主題や関心の所在によって、いくつかのタイプがある。恋愛詩人、社会（↓政治）詩人、労働詩人、自然詩人、思想詩人、形而上詩人、歴史詩人、などが区別できるうち、歌道＝仏道

につながりやすいのは、恋愛詩人、自然詩人、形而上詩人かと思う。恋愛詩は、恋愛対象が「神」や「真理」のメタファーとして詠まれることでも、宗教詩となるし、自然詩は、自然がそのまま神、あるいは神のメタファー、または自然が究極の次元に（間接的であれ）接続していると感じることでも、宗教詩になるだろう（津城前掲書、189～198）。

ただし接続先の世界、開示される次元の性格によって、自我に迫る法外な力に圧倒される詩人（ヘルダーリンのような）もあれば、小さな自我が溶解して、わずかに大きなものに包まれるだけの詩人（私のように小心な）もある。また戦慄と陶酔のどちらか主調音になるかで、詩歌が醸し出す宗教的雰囲気は、異なったものになる。以下、和歌を詠む日々から、近作を発表させていたいただきたい。宗教的な内容、形而上学的な思想を詠んでいるわけではなく、日常の物思い、風景、とくに雰囲気の景観（アトモスケープ）、森の小さな草花、鳥の鳴き声を、「仮の世ながら」、深い実感をもって、嬉しさをもって詠んでいる。日付があるのは、「歌日記」だからである（以下、日守麟伍『くりぶとむねじあ歌日記 卷之弐』パブファンセルフ、近刊所収）。

\*\*\*\*\*

2024年2月12日

寒さが緩んだ午後、用事を済ませて帰ってくる途上、遠い昔の物思いに沈んでいるうち、思いが尽きはてて、我に返りました。深い闇から浮かび上がってきたような、晴れた空が見慣れないもののような、不思議な気がしました。

過ぎし世の 思ひしづまりて

よみがへる 心地こそすれ

青空の奇し

(遠い昔の物思いに沈み、思いが尽きはてて静まり、やがて我に返り、生き返ってきた気がしました。空が見慣れない不思議さで広がっています)

2024年6月2日

遠い昔の、懐かしく慕わしい人を思いながら、森の辺の道を歩いていると、すぐ近くや、また遠くで、さまざま鳥の鳴き声がつづき、曇り空の下、しめった空気の中に、満ちています。

近く遠く かつ鳴きわたる 鳥の声

古へ人と ともに行く道

(昔の人を思いながら歩いている道、すぐ近く、また遠くで、さまざま鳥の鳴き声をして、あたりに満ちています)

開けた並木道に出ると、高い枝が風に吹かれたのか、音が降ってきました。かと思うと、雨が降りはじめて、瑞々しい葉音がして、空に膨らんでいくようです。

吹く風に 枝音やたつ



降りそむる 雨に葉音の ふくらみてゆく

(風に吹かれて、枝音が降ってきたのかと思うと、小雨が降りはじめ、瑞々しい葉音が、空に膨らんでいきました)

2024年6月14日

夏日が続くころ、幼いころ恋心を抱いた人を、夏の海山の風景とともに、思い出していました。夢でも会いたいと思っていると、目の当たり、夢にできてくれました。

いとほしき 人思ひ寝の 夏の夜の 夢にまみゆる ありし日の影

(夏の一日、心惹かれていた人を思い出していると、寝覚めの夢で、中高生くらいの頃の面影そのままの、可憐な人に会いました)

偶然に会ったと思っていたのが、いつまでも忘れられない人になって、今でも恋しさがよみがえることがあります。

仮初に 会ひたる人と 思ひしに 恋てふものは かく燃ゆる知る

(偶然に会った人と思っていました、恋しさがときおりよみがえり、若い時のように、心がときめきます)

2024年6月15日

関東は梅雨入りが遅れ、もう連日が夏日、ときに真夏日となります。日差しの強い中、森の辺の道を、大木の木陰を選んで歩き、高い草に覆われた森の道に入りました。蒸し暑く薄暗い森の中で、自分の体が身近に感じられるのは、いつも不思議な気がします。

大枝の 日陰を歩む

高草の 道に分け入る

真夏日の森

(真夏日、森の辺の大きな木の枝の陰を歩き、高草の道に入ると、不思議な安堵感に包まれます)

2024年6月23日

関東は梅雨に入ったのか、まだなのか、晴れたり曇ったり、雨が降ったりしています。晴れ間に、と思って外にでると、森に近づいたあたりで、小雨が降りはじめました。そのまま細い脇道を歩いていると、木陰を曲がったところに、一かたまりの花が咲いていました。雨水に潤った紫と白の花弁が鮮やかコントラストをなしています。

細道に たち現はるる 紫と 白の花びら 雨に潤ふ

(小雨模様の細道を行くと、雨水に潤った紫と白の花弁が、鮮やかコントラストをなして、姿を現わしました)

## ヘルダーリンとジュリアン・グラック

永井敦子

フランスのシュルレアリストたちは、ドイツ・ロマン派への強い共感を表明していた。アンドレ・ブルトンらはナチズムへの抵抗運動を強めていたさなかの一九三三年にも、アヒム・フォン・アルニムのフランス語訳短編集に序文を与えている。両大戦間期にブルトンらが示したドイツ・ロマン派の作家たちへの関心は、彼らの自然観や人間観がドイツの国家主義的傾向を下支えしているといった認識に回収されてしまうことへの、抵抗でもあっただろう。

ジュリアン・グラック(一九一〇—二〇〇七)は、第二次世界大戦前後にシュルレアリスム運動と関わりを持ちながら、それまでの運動に見られた共同制作や社会行動からは距離を置いた第二世代にあたるが、ドイツ・ロマン派への共感の表明という面ではブルトンを引き継ぎ、加えて自身がエルンスト・ユンガーの友人であることも公表している。

グラックがドイツ・ロマン派に認めるものは、たとえば次のような彼の言葉に端的にあらわれている。

信頼に充ちた同意と和合の、理非を超えた溢れるような感情がそこから湧きのぼってくる、文字どおり生命の歌が迸ってくる静穏の水源。私にとってはノヴァーリスやヘルダーリンの作品、今日ではまたユンガーの作品を通じて、尽きることなく湧いてくるあの静穏の巨大な水源、今日われわれの生きている世界、悲劇的なものがあまりにも容易に受け入れられ、そうしたものを過重に負わされた世界にあっては、その水源に近づく道を開いてくれる何物もないがしろにされてはなりませんまい。(＊)

グラックはナントに近いロワール川下流の沿岸の、小売業を営む小地主の家に生まれた。地方出身の学歴エリート道を歩み、地形学の博士論文執筆のために故郷の近くでフィールドワークをしていたが、第二次世界大戦後に、パリで高等学校の地歴教師をしながら創作する生活を選んだ。彼はある対談で「私は地面に触れるたび力を取り戻すアンテの神話が好きです。しかしそれは私にとつて、農耕詩的な小説に惹かれるということではないし、「触れる」といっても、農業ということでは全くありません」と言っている。彼は文学に、自然とのつながりを人に感じさせる可能性を見る。またそれは人と自然の関係にとどまらず、人と人とのつながりにも及んでいる。先の引用の少し前で、彼はこうも言っている。

トルストイのページはそれを読むだけで、季節や地球運行のリズムに深く結びついた人間樹液、われわれを潤しわれわれを活力で充たす樹液の感情、失われたその感情をわれわれにとりもどさせてくれます。おそらくはもつとも冴えた意識よりはるか以上に、この樹液を通じてこそわれわれはたがいの心を通い合わせることができるでしょう。(\*)

シュルレアリスムにおいて、自動書記など意識の制御を抑えたエクリチュールの実践に、理性による検閲に抑圧されている意識下の解放が期待されていたとしても、それがめざしたのは私という個の内部の再発見以上に、他者と共有する樹液の源泉に触れているという、「個」を超えた生の実感であつただろう。

しかしグラックも、根拠のない楽天主ではない。彼はドイツ・ロマン派の時代を「あらためて思い返すべき」黄金時代と位置づける。一九一〇年生まれ彼は、二十世紀のふたつの世界大戦を経験した世代に属する。第一

次世界大戦では、戦死兵の家族に死亡通知を配るため、町内を自転車で行き回す町長の姿を見たことが初めての喪の経験として記憶に刻まれ、第二次世界大戦では、ベルギーとの国境付近で「奇妙な戦争」を身をもって生き、銃撃戦を経てドイツ軍の捕虜となり、収容所生活を体験した。収容所では空腹に苦しみ、カロリー消費を抑えるために腹這いになって二作目の小説を構想した。空腹の記憶は、毎朝黒パンを部下に分配した、中尉としての彼の役目の思い出につながっている。「生存の保証」たるパンは、四人の部下が固唾を飲んで見守るなか、「難しい外科手術のような」厳密さで彼が五つに切り分けた後、くじ引きで取られてゆく。その「味わいと活力の塊」に「それまで感じたことのなかった充たす力を」感じたこと、グラックはつけた。戦後、彼はこの戦争で知ったドイツの黒パンを、今でもときどき無性に食べたくなることがあると書いた。バゲットにはない稠密さと重みを持つ黒パンのごつごつした歯触りは、彼にとっては生死を賭けた戦闘と、悲惨と屈辱の捕虜生活を体験してもなお、その下に揺るぎなく、国境によって隔てられることもなく存在する、命を育み、自分を他者のあいだにつなぎとめる大地、ヘルダーリンの農夫が耕す大地そのものの歯触りだったのだろう。

(\*)ジュリアン・グラック『偏愛の文学』、中島昭和訳、一九七八年、白水社。

# 十字架のヨハネのいくつかの詩の私訳(併びに付説)

鶴岡 賀雄

十字架のヨハネ (Juan de la Cruz, 1542-1591) は近世スペインの修道士。そのいくつかの詩はスペイン詩史上の珠玉とされる。邦訳はすでに何種類もあり、西和对訳版十字架の聖ヨハネ詩集』(西宮カルメル会訳、新社)もある。芳賀徹訳・今井俊満装画『聖霊頌歌 暗い夜』(非売品)もある。以下は、とくに名高い四編の私訳である。原文にほぼ逐行対応させているが、言葉遣いは私の読み込みによる。推定だが、制作時期の早いものから並べた。

## 一 [夜の泉]<sup>1</sup>

たしかにわたしは知っている 湧き出て溢れるあの泉を  
いまは夜だけれど

「十字架のヨハネの詩には、今日的な意味でのタイトルはない。この詩は、リフレインをとって「夜なれど (Aunque es de noche)」と呼ばれることが多い。吉満義彦や若い井筒俊彦が自らの思いを託すように引用している。冒頭の二行は詩全体のテーマで、「夜だけれど」の一句が各連のリフレインとなる。当時よく行われていた詩形で、十字架のヨハネは同様の形式の作品をほかにもいくつか作っている。

あの永遠の泉は 隠されている けれど  
たしかにわかる その源が どこにあるのか  
いまは夜だけれど

〔この人の世の 暗い夜にも  
信じることで たしかにわかる あの涼しい泉が  
いまは夜だけれど〕<sup>2</sup>

そのはじまりを わたしは知らない はじまりなど ないのだから  
でもわかる どんなはじまりもこの泉から 流れ出てくる  
いまは夜だけれど

わたしはわかる これにまさって美しいものはありえない  
天も地も この泉から飲む  
いまは夜だけれど

---

<sup>2</sup> この「連」は、別人の補作。当時の詩的トポスだった「涼泉(fontefrida)」を組み込むためか。



わたしはよくわかる　この泉には底がない  
だれも泉を渉れない  
いまは夜だけれど

泉は澄んで明るくて　翳りひとつない  
それでわかる　あらゆる光はここから来ている  
いまは夜だけれど

わたしはわかる　水の流れはとても豊かで  
地獄も　天も　人々も　潤していく  
いまは夜だけれど

泉から　生まれる流れは  
とても強くて　なんでもできる　わたしはそれがよくわかる  
いまは夜だけれど

この泉と流れから　またもうひとつ流れができて

泉と流れとともに流れる。わたしはそれがよくわかる  
いまは夜だけれど

〔わたしにはよくわかる この三つには 同じひとつのいのちの水が  
めぐり流れて あれからこれが流れでるのを  
いまは夜だけれど〕<sup>4</sup>

この永遠の泉は 隠されている  
この いのちのパンのなかに わたしたちにいのちをくれるために<sup>5</sup>  
いまは夜だけれど

生きとし生けるものはみな ここへと呼びかけられている  
暗い中でも この水で 満ちたりるから  
いまは夜だから<sup>6</sup>

<sup>3</sup> 父と子と聖霊の三位一体関係（泉⇨父、流れ⇨子、もうひとつの流れ⇨聖霊）が示唆されている。

<sup>4</sup> この連も別人の補作。三位格が一実体であり、聖霊は父と子から出るといふ教義を示す。

<sup>5</sup> 聖体拝領の教義が詠みこまれている。

<sup>6</sup> この連だけ、リフレインは「いまは夜だから (porque es de noche)」。

わたしが願うこのいのちの泉  
それをいま このいのちのパンのなかに見ています  
いまは夜だけれど

## 二 魂とその恋人が交わす歌、

女。

どこにかくれてしまったの？ 愛するあなた

わたしを泣いたままにして。

鹿みたいに あなたは逃げた

わたしを傷つけておいて。

---

<sup>7</sup> 原文は *Canciones entre el alma y el Esposo*。「タイトル」として掲げられている。「靈的頌歌 (*Cántico*

*Espiritual*)」(邦訳では「靈の賛歌」と通称されている。旧約雅歌の翻案とも読め、雅歌からの引用も多い。製作段階に応じていくつかの形態があるが、掲げたのはその最終形態。

。原語は *Esposa*。男性形は *Esposo*。花嫁／花婿と訳されることが多い。この作品には、情景描写のような連  
(一歌) も含め、すべての連にその発話者が設定されている。

あなたを追って外に出た　あなたを呼びながら。でももういなかった。

そこを行かれる羊飼いたち、

牧舎の向こう　丘の上まで行くのですね。

もし　どこでなりとも会われましたら

わたしが大好きなあの人に

伝えてください　わたしは病気で　苦しいです　死にそうですと。

わたしの恋を追いかけて

わたしは行くわ　この山河を越えてでも。

花を摘んだりもうしない。

獣たちもこわくない。

砦だの　国境だのも越えていく。

ああ　森の木立　草の繁み

みな　あの人の手で　植えられたもの。

ああ　緑なす草原

花々がちりばめられて。

教えて。　あなたがたのところを　あの人　通りませんでした？

自然が答える

その方なら 千の魅力をふり撒きながら  
この木々の繁みを 急いで過ぎて行きました。  
でもとおりすがりに目を向けられて  
そのおもぎしのちからだけで  
繁みたちに 美の衣を纏わせていったのでした。

女

ああ 誰がわたしを癒やせるのか、  
もうほんとうに あなたをください。  
送りつけるのはやめにして  
伝言なんて 今日限りで。  
わたしがのぞむあのことを 言えはしないのだから。

道ゆく人は だれもみな  
わたしに伝えて過ぎて行く 数限りない あなたの魅力を。  
それでいつそう 傷が痛む。  
わたしを死にそうにさせてしまうこと それは

みなが口ごもるままの　　なんだかわからない何か。

なのに　　どうして永らえていられるのか

ああ　このいのち！　おまえがいま生きているところには　いのちは無いのに。

そのうえ　おまえを死なそうとしているのに

おまえが受けたいくつもの箭が。

恋人から　おまえのうちに受けとった　あのものゆえに。

傷つけてしまったのだから　あなたはなぜ

癒やしてくれないの？　この心を。

そのうえもう　攫ってしまったのだから

どうして　こうして放っておくの？

攫った獲物を　持つていつてはくれないの？

わたしの苦しみを終わらせて。

あなたにしか　それはできないことだから。

わたしのこの眼で　あなたを見たい。

あなたがわたしの眼の光だから。

あなたを見るためだけに　眼をもっていたいから。

あなたの姿をみせてほしい。

その美しさとまなざしで わたしを殺してほしい。

わかってください、愛ゆえの

この病を 治せるのは

あなたの姿と お顔しかないのです。

ああ 水晶の泉

おまえの その白銀の水面に

とつぜんに 姿が浮かび上がればいいのに！

わたしの願う あの瞳

胸の奥にうつすら浮かぶ あの瞳が。

わたしを見ないで、あなた！

わたし 飛んでいきそう！

〔男〕

戻っておいで 鳩よ。

傷をうけた鹿は

丘のあたりに姿をみせて

。この連では、三行目の途中で発話者が「男」に変わる。



おまえの飛ぶ風を受けて 涼むのだから。

女

わたしのあのひと、あの山なみ

人気のない 樹々繁る谷

遙かな遠い島

響きたてて流れゆく河

愛を誘う そよ風のささやき

静かな夜

もうすぐ朝日がたち昇るころの

静寂（しじま）の調べ

響きわたる孤独

つかれを癒やし

愛かき立てる 夜の宴。

仔狐どもを追い払って。

わたしたちの葡萄園は もう花盛り。

たくさんの薔薇で

花玉をつくれるくらい。

この山のほうには 誰も来ませんように。

吹き止みなさい、死んだ北風。

吹いて来て、南風。愛を目覚めさせるから。

わたしの果樹園を吹きぬければ

あたりに香りが流れめぐって

あの人は花に囲まれて食事を摂るわ。

ああ、ユダヤのニンフたち、

花々が 薔薇たちが

龍涎香の香を漂わせている その間は

垣根の向こうにいてください。

わたしたちの木蔭には 入ってこようとしないでください。

隠れて、あなた、愛しいひと

山なみのほうに お顔を向けて。

そうして何にも言わないで。

ただ おつきの女たちに目を留めて。

遙かな島々をめぐりゆく　この女の。

男

軽やかに舞う鳥のむれ

獅子たち　鹿たち　飛び跳ねる山羊

山々　溪谷　川の岸辺

流水　吹く風　こもる熱気

眠れない　夜のおののき

おまえたちに　心地よい豎琴の音と

人魚の歌声によって願う。

おまえたちの怒りを鎮め

壁を打つのはやめてくれ。

わたしの花嫁がもつとやすらかに眠れるように。

花嫁はもう　入っている

憧れの快樂の園に。

思うままに　憩うている

うなじを凭せかけている

恋人の甘い腕に。

あの林檎の樹の下で

そこで あなたはわたしと愛を誓った。

そこで わたしはあなたに手を差し出した。

それで あなたはきれいになった。

あなたの母が 穢されたその場所で。

女

わたしたちのベッドは花に飾られ

獅子の洞穴で囲まれて

深紅の天蓋で覆われて

やすらかに設えられて

無数の黄金の盾を繞らせている。

あなたの歩んだ跡をたどって

若い女たちが駆けていくわ。

火花に触れられたように

うま酒に酔ったみたいに

神々しい香油のような息を吐きながら。

奥深い酒蔵で

恋人の手から わたしは飲んだ。そうして外に出てみると

広い野原の みわたす限り

知っているものは何もなかった。

追っていた羊もいなかった。

あそこで この人はわたしに心をくれた。

あそこで とても甘美な学問を教えてくれた。

そしてわたしも すべてをあげた

何ひとつ 残すことなく。

あそこで この人の妻になると約束したのだから。

わたしの心は 受けとめられた。

だからもち物は ぜんぶあの人のために使います。

もう 羊の群は追いません。

ほかに 仕事も何もしません。

もう愛することだけが わたしのつとめなのだから。

だからもう 村の入合地に  
今日からわたしがいなかったら わたしの姿が見えなかったら  
行方知れずと 言ってくください。  
だってわたしは 愛に駆られて  
姿を消したのだから。愛の獲物になったのだから。

花々と エメラルドを  
爽やかな朝に摘み集めて  
いっしょに花輪を作りましょう  
あなたの愛で咲いた花を  
わたしの髪で編みあわせて。

この髪の一筋が  
わたしのうなじに流れるのを あなたはじっと見つめていました。  
その髪を わたしのうなじに見つけていました。  
髪に夢中になっていました。  
わたしの瞳ひとつが あなたを縛ってしまったのです。

あなたがわたしを見てくれたとき

あなたの瞳の麗しさを わたしに刻み込んでくれました。

だから わたしを とても好きになったのです。

それで わたしもできるようになったのです

わたしの瞳が あなたを見つめて 心から讃えることが

わたしを 卑く見るのはやめて。

わたしの肌は 黒かったけれど

わたしをじっと見つめていいの。

だってあなたがわたしを見つけてくれた そのときから

麗しさ 美しさを わたしにのこしてくれたのだから。

男

白い小鳩は

方舟に 若枝を銜えて帰って来た。

小鳥はやつと

愛するつがいを

緑の岸辺に見つけたから。



小鳥は孤独に生きていた。  
孤独のうちに 巣を懸けた。  
孤独のなかの 導きは  
たったひとりの 思い人。  
その人もまた 孤独のうちに 愛に傷ついていたのだが。

## 女

もっと楽しみましょう あなた  
あなたの美しさのなか 見に行きましょう  
あの山へ あの丘へ。  
そこには清水が湧いていて  
繁みのもっと奥のほうまで 一緒に入っていきましょう。  
そして高いところに出たら  
洞穴のある岩場まで ふたり一緒に行きましょう。  
そこはとて隠れた場所  
そこに一緒に入りましょう。  
そして 石榴のお酒を味わいましょう。

そこで わたしに見せてください。  
ここから憧れていた あのものを。  
そして わたしにくださいね。  
そこで あなた わたしのいのち、  
遠いあの日にくださった あのものを。

風がそよぎ

小夜鳴き鳥の甘い歌がきこえる。

繁る木立と その麗しさ。

そんな静かな夜に

燃やし尽くして でも苦しくはない 炎が燃えている。

見る者は 誰もなかった。

アミナダブも姿を消した。

包囲の陣も やすらぎを得て

騎士たちは

水辺めざして降りていった。

三 [暗い夜]<sup>10</sup>

暗い夜に

愛に焦がれて かき立てられて  
なんてしあわせな冒険でしょう  
気づかれもせず 家を出ました  
わが家はもうひっそりとして

闇のなかを 迷いなく  
秘密の梯子で 姿も変えて  
なんてしあわせな冒険でしょう  
闇のなか 顔も覆って  
わが家はもうひっそりとして

このしあわせな 夜のなか  
そっと隠れて だれにも知られず

---

<sup>10</sup> 「暗夜(Noche Oscura)」と通称される。

わたしもなにも 見はしなかった  
導く明かりは なにもなかった  
心に燃える 光のほかには

それがわたしを 導きました  
真昼の光より もっとたしかに  
そこで待っていてくれました  
よく知っている あのひとが  
そこにはほかに誰も来ない

ああ 夜よ あなたが導いてくれた  
ああ あけぼのよりも いとしい夜  
ああ 夜よ あなたがふたりを 結んでくれた  
恋する男を 恋する女と  
恋する女が恋する男と 同じ姿に変わるほどに！

花のようなわたしの胸  
この人にだけ けがれなくまもってきた  
そこにこのひとは まどろんで

わたしはかれを いくしんで

杉の扇はそよ風を送っていました

お城のほうから 風がながれて

恋人の髪をまさぐる わたしにふれた

その透明な手で

うなじを掠めた

あとはもう なにもわからなかった

そのままじつと すべてを忘れて

恋人に 頬よせたまま

すべてはやんだ もうなにもしない

思い煩いは うちすてられて

白百合の間に 忘れさられて

#### 四 神との内密な合一のなかで魂がつくった歌<sup>二</sup>

ああ 愛の炎 あなたは生きている！

そしてやさしく傷つけてくる

わたしの魂の いちばん深い真ん中を！

でも あなたは優しい方。だから

もう おねがいだから 終わりにして

この甘い出会いの 隔てのヴェールを引き裂いて！

ああ 火傷がこちよいい！

ああ 傷口がうれしい！

ああ 柔らかな手が！ ああ 繊細にそっと触れてくる！

これこそ永遠のいのちの味わい

なにもかもが報われる

あなたはわたしを殺したのに、死をいのちへと 変えてくれた！

ああ 篝火が燃えて

---

<sup>二</sup> 「愛の生ける炎(Llama de Amor Viva)」と通称される。文法上はすべて感嘆文で歌われている。

その照り映えのなか

感官の深い洞窟から

まえは暗くて なにも見えなかつたのに

えも言われない麗しさで

熱と光が放たれてくる 肌寄せる恋人にむけて！

なんておだやかに でも愛おしく

あなたは目覚めるのかしら わたしの胸で

そこは あなただけが住まう ひみつの場所

そのあなたの 甘い吐息

善と栄光に満ち満ちて

なんて繊細にわたしを夢中にさせることでしょうか！



・ヘルダーリン／ハイデッガー

鎌田東二さんの詩集を書評する機会を、鎌田さん自身の紹介でいただいた。鎌田さんのある意味での処女作『水神傳説』（昭和59年）から『悲嘆とケアの神話論』（令和5年）まで、5冊ほどになるうか。そうした機縁で、ヘルダーリンの詩をハイデッガーの「解明」に即して読む、というオンライン読書会に誘われた。私には、「ど真ん中」の読書会だった。鎌田詩集を書評したときの背景にあった私自身の詩観は、まさにハイデッガー経由のヘルダーリンを基準の一つにしていたからである。

私がヘルダーリンを始めて読んだのは大学の学部時代である。いささか哲学青年だった私は、ハイデッガーの「転回」以降の思想に興味をもって、いくつかの著作を素人読みしていた。哲学や文学は原書で読まねばならない、という教えを真に受けて、習いたてのドイツ語で、理想社版のハイデッガー選集を助けに、『ヘルダーリンの詩の解明（*Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung*）』にも取り組んだ。そしてハイデッガーの解明以前に、冒頭に全文が掲げられていたヘルダーリンの詩そのものに衝撃を受けてしまった。「帰郷―近親者に寄す―（*Heimkunft/ An die Verwandten*）」の冒頭、第二行目末の「das gährende Thal」（手塚富雄訳は「暗き谷の顎

（あぎと）」まで読み進んだところで、もう異様な感動が迫って来た。時は昭和四十年代なので、「ガーン！」という古い漫画用語で表してもみたい衝撃感である。

文法もおぼつかなく、辞書を引き引き読む当時の（今でもだが）私に、ヘルダーリンのドイツ語がちゃんと読めようはずはない（今でもだが）。だからまったく主観的な、独りよがりの勝手な震撼である。しかし感動は有無を言わせないものだ。誤読誤解だろうと、絶対的権威をもつ。感動自体に「正誤」判断は適用されない。

だから、ドイツ語に精通し、ネイティブのような語感、音感を身につけ、文学史の該博な知識がなければヘルダーリンを「正しく」読めないなどということはない。七五調が沁みついている日本語ネイティブでなければ和歌は味わえない、わかるはずがない、などということはないのと同断である。げんに、そんな私の幼いヘルダーリン体験が、上述したように、爾来「詩」とは何かを考えるときの、また私なりに詩作品を評価するときの、不動の基準の一つ（すべてではない）となっている。

詩についてのこの経験が、ハイデッガーの「解明」に導かれ、支配されたものかどうかは、わからない。しかし、後期ハイデッガーへの私なりの（これもほとんど誤解なのだろう）理解から、ヘルダーリンの詩を読んだと感じた何かを取り除くことはできない。ハイデッガーの言いたい（のだろう）ことに、哲学的「理論」とどまらない実質を与えているのが、ヘルダーリンの「詩」である。

### ・十字架のヨハネ

私の専門は、ドイツではなくスペインの神秘思想である。その中心に据えてきたのが、十字架のヨハネである。大学院時代に取り組んでから既に半世紀、この見知らぬスペインの人の文章を読み解こうとすることで、人生の大半は過ぎたのだと思うと、うたた感慨を覚える、というべきかもしれないが、案外そうでもなく、「ああ、人生とはそんなものか」というのが正直なところである。

その十字架のヨハネは、キリスト教神秘家の代表者の一人だが、詩人でもあることが彼の神秘思想を際立たせたものになっている。「詩人神秘家」であることが彼の大きな魅力である。では、十字架のヨハネにおいて、詩と神秘思想はどう関わっているのか。いろいろ論じだすとどうしても長くなるので、要点だけを言うとこのようになる。十字架のヨハネにおいては、その神秘思想はまず「詩」として言語化された。言語以前の体験・経験

の地平を文字通り言外に想定するとして、そしてそこにこそ「神秘」の実質があるとして、その実質にいちばん近い言葉、実質から最短距離で言葉になったものが彼の詩だった。このことは彼の生涯の歩みからもたゞられるのだが、著作の形態、形式自体に端的に現れている。十字架のヨハネのまとまった著作である『カルメル山登攀』、『暗夜』、『霊の賛歌』、『愛の生ける炎』の四編は、すべてが自作の詩（上に私訳を掲げた）の「解明（declaración）」として著されているのである（『カルメル山登攀』と『暗夜』は、ともに「暗い夜」の解明）。

いずれの著作でも、まず冒頭に、解明される詩の全体が掲げられる。その上で、「連」ごとに順を追って解明がなされていくのだが、その都度、解明される連が掲げられ、さらにほぼ一行ごとに、そこに込められている「意味」が、修道者が神との合一の道行きの途次に経験するさまざまな心理状態やその神学的意味として説き明かされていく。そしてこれが、彼の神秘思想の表明となっていく、という次第である。つまり、彼の神秘思想とは、まず詩として言語化され、その詩の言葉に結晶した神秘的合一の境地が、詩の言葉の解明というかたちで、知的に了解可能な理論言語の地平に開き陳べられたものである。とともに、こうして解明されることで、詩的感興は生みつつもその意味の知的な了解はできなかつた詩に理論的・思想的意味が充たされて、詩の言葉の新たな読みが可能になる、という一種の循環的效果が生まれる。そしてその循環がさらに、詩の言葉がそこから生まれてきた、言語以前の神秘的合一の境地そのものをなんらか感知させる、という効果が期待されている。こうした、「言語以前の神秘」⇔「詩の言葉」⇔「解明（理論）の言葉」という、言葉の三次元の往還自体が十字架のヨハネの神秘思想の基本構造でもあり、彼が「詩人神秘家」と呼ばれてよい所以となっている。

わかりにくい説明になってしまったが、言いたかったのは、ハイデッガーの『ヘルダーリンの詩の解明』は、十字架のヨハネの著作と同じかたちをしているのではないか、ということである。十字架のヨハネの場合

は、詩人と思想家が同一人物となっているけれど。では、もしやハイデッガーは、十字架のヨハネを意識して、「詩の解明」という形式の哲学書を試みたのか。そんな可能性は小さいと思うが、彼が十字架のヨハネの本をまったく知らなかったとも思えない。詮索はどうでもよいが、十字架のヨハネからハイデッガーまで、ということとはもつと古い時代からもつと新しい時代まで、さらには西洋という地域的枠を越えて、詩と神秘思想のかかわり、拡げて言えば「宗教的なもの」と「詩的なもの」との本質的にかわりは、おそらく普遍的に見いだされるもので、私自身により惹かれるものである。鎌田東二さんの仕事への私の深い共感もここに由来している。

## ヘルダーリンのギリシヤ

鎌田 東二

ヘルダーリンのギリシヤは、狂いと愛とあこがれと記憶の中にある。それは、帰郷することの叶わぬ故郷であり、届かぬ諸源である。

ヘルダーリンは、宣言し、嘆き、狂いながら神託をもらす。

ディオオーティーマに、ディオオーティーマから。

そのヘルダーリンの園に入ることはできぬ。

施錠しているのは、彼方の存在ではなく、訪問者自身だから。

だからこそ、ヘルダーリンは吾だと言っておこう。

そんな戯けた彫琢を通して、虹の橋を渡る。ギリシヤへ、泉へ、デルファイへ。

ディオオーティーマは聴く。雷鳴を。

脳天から大地へと貫通する声を。

そうして、ヘルダーリンは、記す。

人間の霊は最初のしるしによって、完成したものをすでに知り、  
大胆にも鷲のように雷雲に向って

飛び立ち、来たるべき神々を

あらかじめ預言して、

(『ヘルダーリン全集 詩Ⅱ 1800 - 1843 2』15 - 16頁、手塚富雄訳、河出書房新社、1966年初版、2007年新装版)

そして、この詩篇「ルソー」は、ここで中断する。

中断はしているが、つぶやきと預言はつづく。

訪問者は、みずからの「霊」を鍵として、施錠を外し、秘密の園に入り、  
デオーターイマ、ヒュペーリオン、ルソー、そして、ヘルダーリンと語らう。

そこには、言葉は、ない。

ギリシャ語もラテン語もドイツ語も、ない。

自然のことばだけがいきかうのだ。

# 鎌田東二のギリシヤ、あるいは、デルフォイの夢

## 序 冬の星座

### 春の夜明け

「はよ起き！ 父ちゃんが死んだんじよ。」

ふるえるような、はりさけるような母の声で目が覚めた。

どんな夢を見ていたのか、なにもおぼえていない。そのあとのことも、いつさい記憶がない。

一九六六年三月十七日、交通事故で突然父が死んだ。私の高校受験の合格発表がある前日のことだった。父は私が合格するかどうか心配していたようだった。

だが、合格の知らせも聞かずに、前日の朝、突然死んだのだった。

翌日の徳島新聞朝刊に、父の死と私の合格発表が同時に載った。

私の記事は、一行。合格高校名と合格者名の記事。

父の記事は、三行。小見出しがあった。「酔って、転んで、死ぬ。」

その日の深夜、父は桑野町の食事処で酒を飲み、オートバイで家に帰ろうとして、桑野川の橋の近くのカーブ

のところ、曲がり切れずにか、対向車に目がくらんでか、事故原因は不明であったが、転倒して道路下に落ちたのだった。

目撃者がいたのか、そのあと通り過ぎた人がいたのか、救急車で徳島大学附属病院に運ばれたが、途中で息を引き取ったようだった。徳島市蔵本町にある徳島大学附属病院での死亡確認は三月十七日午前三時三十五分。

その間、私たち父の四人の子どもたちは、そのようなことが起こっているとはつゆ知らず、それぞれの寢床で熟睡していた。

それが、朝まだき、甲高い母の震えるような声で突然眠りを破られたのだった。

振り返って思い起こすと、母も動顛していて、何をどうしていいのか、よくわからなかったのだろう。

青天の霹靂という言葉があるが、予想外の出来事だったことは間違いない。

母を襲った衝撃がどのようなものであったか、そのときも、いまも、まったくわからない。

印象としては、気丈にふるまう母の姿はある。しかし、どのような表情をしていたかとか、どのような仕事をしていたかとか、兄や姉の表情がどうだったかとか、一切記憶がないのだ。

記憶があるのは、父の葬儀が終わって一週間ほど経ったころ、弟が家の前の田んぼの畦道でポーッと座っている姿だけだった。

だが、誰が死のうか生きようか、日々の日常は淡々といとなまれ、過ぎてゆく。

四月になって、私は高校一年生となり、入学式に出席した。その瞬間、あえて選択した高校を間違ったと思っ



たのだった。

後から考えると、その誤った選択の父なき高校生活の三年間が今の私を作ったといえる。母の苦勞や兄弟たちの失意をよそに、私はふしぎな高揚感と絶望と道なき道の戸惑いの中にあつた。

私の前にレールも道もなかった。見えなかった。どこから来て何処へ行くのか。自由であつたが、どうしていいか、わからなかった。

二年後の一九六八年四月、九州の青島への一人自転車の旅から帰つてきて、私は口から火山弾を吐き出すようにして詩を書き始めた。

言葉はわたしの口中から反吐のようにどろどろと出てきて、止むことがなかった。

それが今もつづいている。

私の地殻変動は、父の死から始まっている。

その父が、戦争トラウマを抱えていたことを子どものころから薄々とは感じていたが、二年前にステージⅣの大腸がんが発覚してはつきりとわかるようになった。

父・田中義美は、大正九年（一九二〇）三月三日、徳島県那賀郡桑野村大字桑野字大谷四十二番地で生まれた。父・田中嘉吉、母・田中リキの六男末っ子として。

母リキは、乳飲み子の義美を抱いたまま、ある朝死んでいた。父義美は、生後三ヶ月くらいだったのだら

うか、冷たくなった母親に抱かれたままある朝目覚めたのだった。当然、そのことの記憶はないはずだ。

義美は、桑野尋常小学校に入学し、卒業後、桑野尋常高等小学校に進んだ。当時珍しいバスケット部に入り、活躍した。当時としては背が高く（一メートル七十三センチ）、シュート力もあった。五歳年下の下級生だった母鎌田フミヨは上級生の田中義美のその姿をあこがれをもって見上げていたという。

が、家が貧しく、旧制富岡中学校に進学することができなかった。バスケット部の親友の檜原君は富岡中学に行き、卒業後、徳島師範学校（現徳島大学教育学部）に行つて小学校の教諭となった。

父に強い向学心と進学希望があつたことは、その後の彼の軌跡をたどると見えてくる。

何年のことになるか、よくわからないが、おそらく日中戦争のさ中の昭和十年代のことだったのだろう、志願して軍隊に入り、宮城県名取の陸軍飛行学校に入つて航空兵となり、満州に渡つた。満州での知能テストで最優秀となり、満鉄の総裁に呼ばれて褒められたという。そのことを姉は父から聞いて覚えていらっしゃるらしい。そのことを最近知つて、父は姉の前でそのようなことを語っていたのか、と不思議な気持ちが出た。

というのも、三人の息子たちの前では、酒に酔うと、まっぴだかになつて、「わしの人生は余生だ。同期の戦友はみな死んだ。特攻隊で。わしと、もう一人、肺尖カタルになつて陸軍病院に入り、除隊した。もう一人の生き残つた戦友は、戦後、民間旅客機のパイロットになつたが、墜落事故で死んだ。残つた同期は、わしだけじゃ。」と、泣くように、嘆き叫ぶように言い放つて、朗々と何曲も軍歌を歌いつづけるのだつた。その「儀式」がひとしきり終わるまで、私たち息子三人は正座したまま畳の上に座らされているのだつた。

ある朝起きると、家の庭の木がすべて斬られていた。軍刀をもってよく手入れしていた父が何を思ったのか、

怒りにかられてか、悲しみにつきうごかされてか、庭木を全部斬りはらってしまったのだ。誰もそれを止めるものはいなかった。脳溢血で寝たきりの祖父も乳がんの義祖母も母もだれも。止めることはできなかった。

「酔って、転んで、死ぬ。」と三行で徳島新聞で死亡記事を書かれた父は、死の間際何をおもっていただろう。

死んで逝った戦友たちのところに逝けることに安堵のころもちがあっただろうか。

最近、父の死を、それとして受け止めることができるようになった。

これまでは、みじめとまでは思わないが、つらい死だっただろうとおもっていた。

しかし、まんざらそうでもないかもしれないとおもうようになった。

じつは、父は、いつも早くおれも死にたいと思っていたのではないだろうか。つねに、自分も早く死ぬべきだ、とおもっていた。そうにちがいない、と確信するようになった。

戦友に対する自責の念、そして、自己処罰の念慮に常に引き戻されていたのではないか。自殺はできない。しかし、事故死であれば。

父はオートバイに乗っていた。元優秀な航空兵だったようだから、運転技術には自信があったはずだ。オートバイに乗っている姿は颯爽としていた。いくらか長身で体格もよく子どものころは女子児童のあこがれの美少年であったことは、残されている写真からもうかがえる。

父は、航空兵として、特攻隊の一員として知覧の飛行場から飛び立つことを当然と考えていただろう。

だが彼は知覧から飛び立った特攻隊員の一員にはなれず、靖国神社に英霊として祀られることもなかった。戦友たちは、ほぼ全員靖国の英霊となっている。

おれの余生はなんだったのか。父の胸裏と脳裏に常に甦る戦友たちとの日々。そのときの甘酸っぱくも苦いような切ないような感情。取り戻すことのできない十代の終わりの日々。戦争のさ中ではあったが、精一杯生きて、精一杯死んだ。

その戦友たちに比べて、戦後のおれはのんびんだらりと子どもたち四人を得て、このようなふがない日々を過ごしている。

彼はどうしようもない自己処罰感に日々苛まれていたのではないだろうか。酒を飲むと、それが一挙に吐き出された。その「反吐」を受け止めたのは、三人の息子たち、中でも二男の鎌田東二、私だった。

父が死んで、私は一切悲しむことはなかった。一滴の涙も出なかった。

そうではなく、むしろ、開放感があった。おれは自由だ。父を喪ったが、自分は自由である、という開放感があった。それは、おそらく、兄にも、弟にも、姉にもなかった感情であり感覚だっただろう。

反抗期となり、父に向って反撃の拳を振り上げたたん、父が不在となった。そんな感じもあった。

それは、哀しみではなく、開放ではあったが、しかし、自分はどこへ行けばよいのか、まったくわからない無道の渦中にあった。

父の死から始まるわが家のてんやわんやについても、父の葬儀のことについても、まったく記憶がない。思い出せない。

私は十四歳の終わり。あと三日すれば三月二十日になり、十五歳になるはずだった。こうして、私の十五歳は、不幸ではないが、無道無策で始まった。

## 夏の行方

その夏がどんな夏だったか、いまとなつてはほとんど思い出せない。ただ一つのことを除いては。

その夏、七月の中頃、わが家が徳島県下で一軒だけ集中豪雨により、裏山の土砂崩れに吞み込まれ、全壊してしまつた。

右隣の家とは五メートルも離れていない。左隣の家とは、小さな畑を挟んで十メートルの距離。

だが、奇妙なことに、両隣にはまったく何の影響もなく、ピンポイントで全壊したのだ。午後七時ごろのことだつた。

家の中には、母が一人で、兄（長男）と姉（長女）の帰りを待っていた。

阿南市富岡町にある電電公社に勤めていた姉の帰り、豪雨だったこともあり、桑野駅まで兄が車で迎えに行つていたのでした。

突然、ゴーッと云う物凄い音とともに地響きがしたという。

母は、咄嗟に、というより、動物のように、一目散に家の中から土砂降りの雨の中、外に飛び出た。そして、庭に出て、後ろを振り返つた。

見る見るうちに、わが家の母屋が土砂に吞み込まれ、押し流されてきた。身の安全をはかりながら、その仔細

を見つめていた。

その時の母の気持ちがどのようなものであったか、訊く機会は何度もあったはずなのに、一度も訊いたことはない。

ほどなくして兄が姉を助手席に乗せて家に戻ってきた。そこに、土砂降りの中、ずぶぬれになりながら呆然と突っ立っている母と土砂に呑み込まれたわが家を兄と姉は目撃することになった。

その時の兄と姉の気持ちについても、一度も訊いたことがない。

何十年もの生活を重ねてきた自分たちのおいのしみついた家を喪失した彼らが、その時、どのような思いでいたのか、一度も訊いたことがないし、想像力をはたらかせたこともない。

そうなのか。そうだったのか。そうなるのか。

そのことを知って、ただ、そのように感じたただけだった。

そして、もう金輪際母に無心することはできないと覚悟した。

フーテン気質のぬけない能天気な学生だった私が社会的な意味で自立したのはこの時だったとおもう。一九七二年七月のことだった。

## 秋の気配

父は春死んだ。

が、祖父母は秋に死んだ。

秋の気配は、私にはつねに祖父母の死とともにある。

明治二十一（一八八八）年十月二十四日生まれの祖父鎌田藤七（のちに東助と改名）は、昭和三十八年十月二十六日、秋のある日、この世を去った。行年七十六歳だった。藤七は「七番目の子ども」ではなく、父鎌田辨蔵、母クスノの長男として生まれた。

祖父とは「いんきや」で小学生の六年間を祖母とともに三人で過ごした。

その秋の気配は忘れられない。墓地に向かう行列もおぼえている。何本かの旗を先頭に行列がつづき、菩提寺の万福寺の住職の後に棺桶と親族が従う。

気だるく、物憂い、何もやることのない奇妙な倦怠感の中にあった。

葬儀に緊張していたという記憶はない。大工の棟梁であった祖父は県南地域では名工としてよく知られていた。宮大工もできるほどの腕前で、見事な設計図も描いた。時代が時代なら、地方の名建築家と名を馳せたであろう。

今でも、桑野町に帰ると、「藤七はんの孫なんけ〜」と言われることがある。

新しいもの好きで、桑野町で最初に自転車を買って乗った人ということでも知られていた。進取の気もあったのだろう。

祖父について私が知っているのは事柄の多くは他人の評価で、私自身が知っているのは日常の中の脳溢血で右半

身不随の言葉もしゃべることのできない祖父の姿だけだった。数年間も共に過ごしていると、いつの間にか祖父が何を感じているか、何をしてほしいか、わかるようになる。

おむつを替えてほしいのだから、尿瓶に排尿したいのだから、とか。ブザーで母屋にいる母を呼ぶ祖父の表情の中には早く何とかしてほしいという気持ちにじんんでいた。

祖母は乳がんで医療拒否していたので、本当は血のつながっていない母が毎朝夕消毒をするだけだった。

今となっては、祖父の介護、そして、夫の突然死、四人の子どもたちの養育、母に降りかかってきた災難ともいえる苦勞の数々が少しはわかるようになった。そして、母に対する感謝と敬意がいや増しに増してきた。

人生を楽しむというゆとりは彼女にはなかった。

私は祖父母と一緒に暮らしながら、自分の方が祖父母よりもおとなであるようにおもうことがしばしばあった。祖父母が自分より小さな子どもに見えることがたびたびだった。

のちに、私は『翁童論——子どもと老人の精神誌』（新曜社、一九八八年）という本を書いたが、その論の根底にあった実感は、子どもである私がじつは老人で、老人である祖父母じつは子どもであった、というその頃の私の直覚であった。それを理論化し、事例を引いて跡付けただけのものだった。

私の中で、子どもと老人の境目はふたしかであり、明確な境界はない。いつでも反転し逆転しうるコインの裏表のようなものにすぎなかった。祖父母は私にそのことを教えてくれた。だから、『翁童論』は祖父母との共著で



ある。

祖母鎌田納は、明治三十一（一八九八）年九月十五日に梶南の漁師町の椿泊で父阿利音吉と母フサの四女として生まれ、昭和四十五年（一九七〇）九月十五日に、誕生日と同じ日に身罷った。行年七十二歳。納は秋の人であった。

春生まれの私は春になると「たまあくがるる」気分になり、やもててもたまらず、旅に出たくなるが、秋になると、何か愁いと切なさに浸される。それは祖父母の気配と気分が私に乗り移ってくるからだ。

祖母は、漁師町に生まれた。家は網元と聞いていたが、その分家筋の貧しい漁師だったのかもしれない。でなければ、徳島に芸者に出ることなどなかっただろう。

彼女は美しい人だった。おそらく、徳島の新町や富田町で美人芸者として売れっ子だった時期があるのではないか。誇り高い彼女のふるまいを思い出すたびにそのようにおもう。

つねに、火鉢を囲んで、キセル煙草を吸い、『マーガレット』や『少女フレンド』『花と夢』などの少女漫画を読み、三味線を弾く毎日だった。寝たきりの夫の世話も家事手伝いもいっさいしない。そして必ず自分用の特別な湯飲み茶わんにたつぷりと日本酒を注いで晩酌にした。

自分の世界と流儀を何ひとつ壊すことのない人だった。子どもの私には、父母は夫婦のおとなであったが、祖父母は夫婦であるとも、おとなであるともおもえなかった。むしろ、私以上に子どもに見えた。私は祖父母の保護者のような気持ちにしばしばなった。祖父母を年長者とは思えなかったのだ。

そして、中学生になるまで、祖母の布団と一緒に眠った。右隣は少し高さのある藁布団に横たわっている祖父がいた。祖父と祖母の間、三本川になって私たちは夜を過ごしたのだった。

どのような子どもでも、病人とともに八年もともに生活したら、どこか憂愁を身に着けてしまうのではないだろうか。そしてその憂愁はいつも秋の気配をともなっている。

祖父は、十月二十四日に生まれて、十月二十六日に死んだ。

祖母は、九月十五日に生まれて、同じ九月十五日に死んだ。

私も祖父母に倣って、春に生まれて春に死にたい。三月二十日生まれの私は、いつも生まれた日と同じ、三月二十日に死にたいと思っている。

その祖母が、一度だけ真剣な面持ちで、病気で寝込んでいる私の隣に来て、緊張した強い言葉でこう言ったことがある。

「うちは、おまはんのほんまのばあちゃんじよ。」

本当の血のつながりのある祖母が、おまえの本当の祖母であるなどとあえていうものだろうか？

それから、祖母が祖父の五度目の妻であることを知るまでに、それほど時間はかからなかった。

が、その「事実」を知った後も、私は鎌田納が本当の祖母だと思いう気持ちは変わることにはなかった。私に一番影響を与えたのは、この祖母だったから。血がつながろうかつかつながらなろうか関係ない。もっと深いチ(霊)のつながりがあることを私はこの祖母をとおして知ったから。

## 冬ざれの島

一年半も経たないうちに、この冬ざれの島にふたたび訪れることになるとは。

一九七一年四月十一日、上野から初乗り料金の切符を買って、夜行の急行と鈍行を乗り継いで、朝七時過ぎに新潟駅に着き、そのまま駅員に切符を渡して改札をとり売り抜けようとして、後ろから「お客さん、切符が違いますよ！」と声をかけられたのか、ぐつと襟首を掴まれたのか、記憶は定かではないが、要するに、新潟駅でキセル乗車がばれて、駅員につかまってしまったのだった。

友人の中島和秀は、周到に東北一周の割引周遊券を購入して持っていたので、駅員につかまっている私を横目に悠然と改札を通過していった。ちよつと心配そうな表情もしているが、この事態を楽しんでいるようにも見えた。しようがない。なるようになれ、だ。

それから、小一時間、こつてりと、新潟駅の鉄道公安室でしぼられた。解放されたのは一時間後だが、今後に影響く重要な出来事があった。

それは、新潟駅から徳島県阿南市桑野町の桑野駅まで電話が行き、母親が駅に呼び出され、そこで罰金料金を払わされたという事態があったことだ。

これにより、何よりも世間体を大事にしてきた母親にさらなる心配と苦勞をかけることになった。というのも、この事態の出来によって、桑野町全体というのは大げさだが、地元の多くの人に「鎌田フミヨさんの二男のトウジくんがキセル乗車して新潟駅でつかまったんやと。」を一気に噂が広がったからだ。そのために、母親はいろんな人から「トウジさん、元気でやってますかあ。」とか、とぼけたような、あいまいな挨拶をされることとなり、気苦勞することになったとおもう。

だが、そんなことは、どこ吹く風。全く気にせず、中島和秀と私は佐渡を一周し、秋田県男鹿半島から、青森県下北半島まで足を伸ばし、性懲りもなくさらなるキセル乗車の流浪の旅をつづけたのだった。

自分がどんなことをしているのか、それがどのような影響を周りに与えるかなど、まったくひとかけらも考えることがないほど幼稚だった。

そんな自分が、ほぼ一年半後に今度はある女子学生にキセル乗車をさせて、いっしょに佐渡まで来た。一九七三年二月のことだった。

なぜ佐渡に行ったのか、今となってはその「犯行動機」は判然としない。世間知らずの女子学生が初乗り料金で渡した上野駅発行の切符はそのまま何も咎められることもなく改札口を通過した。上野から長岡まで急行、長岡から始発の列車に乗って、新潟駅で下車。

そのまま駅前のソバ屋で熱いそばを食べてから新潟汽船だったかで佐渡に渡り、外海府に行ったのだった。

猛烈な風。獰猛に砕け散る冬の荒波。飛び込んだ瞬間に藻屑となって錐揉みされるような。あらゆるいのちの

聲を掻き消す怒濤の海。

その海を前にして、どんな声もなかった。

これから先、何をしようという思いもなかった。

ただ、ひたすら冬の海を見つめていた。それだけを仕事にしているかのように。

### 【付記】

その世間知らずの女子学生（山岸左紀子）は現在半世紀以上生活を共にしている配偶者である。彼女とは、このとき、佐渡から大阪経由で隠岐の島まで、島渡りの逃避行をつづけた。どれほど周りを心配させれば気がすむのか、私の無鉄砲はとどまることがなかった。

### 崇り

母を支配していた感情は「崇り」と世間体だった。

自分が鎌田家を引き継ぎ、小学生の時にあこがれの君であった美少年が戦地から帰ってきて、仲介者があった

のだろう、昭和二十三（一九四八）一月二十七日に、母鎌田フミヨは田中義美と結婚した（婚姻届けは同年七月三日）。

母は戦後まもなく北海道の叔父の家に身を寄せていた。が、旧制富岡中学を優秀な成績で卒業した鎌田一族の期待の星で国鉄桑野駅に勤めていた兄が肺結核で急死したため、急ぎ郷里に帰り、家を継ぐことになったのだ。そして、小学生の時にひそかにあこがれていた上級生を結婚した。

母にとっては、それは思いがけない展開であり、喜びもともなうものであっただろう。

結婚してまもなく昭和二十三年（一九四八）一月一月二十一日に長男吉仁が生まれ、翌昭和二十四年七月二十日に長女モト子が生まれ、そして年子で昭和二十六年三月二十日に二男東二が生まれた。末っ子の三男功三は昭和二十八年二月二日に生まれた。

たいへんではあったが、つづげざまに四人の子を産んだころの母が、生涯でもっとも幸せな時期だった。何といても、あこがれの君の子四人も授かったのだから。

私はしかし生まれた時から母を苦しめる運命にあった。

ご丁寧にもへその緒を三巻き首に巻いて産道を出ようとするとするたびに、へその緒が自分の首を絞めて苦しいので、すぐに引っ込み、また陣痛促進剤で産み出そうとして力んで顔を出しても、また自縄自縛、自分のへその緒で自分の首をしめてまた子宮内に引っ込む。それを繰り返したため、母体も胎児も共に危うい事態となり、ようやくにして産婆が取り上げたとき、母は疲れ切り、私は顔だけでなく全身鬱血のチアノーゼで紫色。一言も泣きもしなかった。

ふつうの赤ちゃんなら上げるはずの「おギャー！」という声は私の口から発せられなかった。「ふにゅ〜」とか

「ふにゃ〜」とかいったか細い吐息のような息もたえだえの状態。それが、私のこの世へのデビューだったという。

このことは、ことあるごとに、母からくりかえし言われてきた。たぶん、おまえには苦労させられたよ、今もね、ということを書いたかったのだろう。

そのとおり、吾ら四人きょうだいの中で、母を困らせ、心配をかけとおしたのは私一人だった。

兄も姉も弟もじつにおだやかだが、私は癩癩持ちで、とてつもなく激しい不安定な気性。どうにも扱いにこまったにちがいない。

そしてときどき、「鬼がいる！」とか、「ぼくには山に巣があるんや。」とかと、奇妙なことを口走る。

それは私にとっての心的現実だったが、きわめて良識的な現実主義者で、世間的とか世間並みとか後ろ指をさされないとかを極端に気にする常識人である母には、この鬼っ子のような非常識そのもののわが子には手を焼いただろう。

高校生のころ、あまりに心配した彼女は、橘（隣の港町）の霊能があると評判の占い師のところに行って、わが子の未来を占ってもらった。そして、その占いの結果を聞いて、気が休まるどころか、いつそう心配事が募ったのだった。

占い師は言った。「この子はいい方にいけばよい方で目を出し、かなりなことを成し遂げるが、悪い道に逸れれば悪い方でより悪いやつになる。」

これを聞いた母はさぞかし困ったことだろう。判じ物のような、禅の公案のような矛盾そのもののような答え。二律背反。残念ながらと言うべきか、幸運にもというべきか、このような両義性に耐えられるだけの感性と頭脳を彼女は持ち合わせていなかった。彼女は単純明快素直を求めているから。どこから見ても複雑系のひとつではなかった。彼女が一番恐れたのは、いつかこの子は悪の道に染まってやくざの親分になるんじゃないか、ということだった。

かあさん、あなたのしんぱいはあつた。ぼくは、ほとんど、「やくざのおやぶん」になっちゃつたよ。なぜなら、「スサノヲの子分」だからね。この世の枠から外れっぱなしだからよう。

場違いで生まれてきたぼくは、場違いで死んでいく。生まれてきた場所を間違えた。ぼくは、「とりかへばや」のような取り換えっ子だったんだよ。鬼の子として、鬼の世界に生まれるべきだった。そうおもうよ、かあさん。

母を支配していた感情、それは「たたり」だった。

「たたり」とはなにか？ 日本民俗学はそれを神聖なる存在や靈威ある諸存在の立ち現われととらえ、その「たちあらわれ」が「たちあり」↓「たたり」↓「祟り」となっていくって、襲ってくる災難や災害や不幸、もろもろの排除したい破壊や崩壊という意味合いを含むようになっていったとかんがえた。

母は確かに「祟り」を恐れていた。

それは、まず第一に祖父鎌田藤七が「祟り」でしんしょうをつぶしたから。関東大震災が起こる前、飛ぶ鳥を



落とす勢いの大工の棟梁であった祖父は、何十軒？ いや、百件近い新築家屋の請負をしていたらしい。県南地方のほぼ全域の建造物を受けた、ということか。

だが、大正十二（一九二三）年九月一日、関東崖震災が起こり、みるみるうちに材木が高騰。契約金内で仕事を完成されねばならぬ請負仕事をしていた祖父は、それにより、仕事を仕上げれば仕上げるほど多大な借財を背負うことになったのだった。

その年の正月、祖父は宣言した。「我が家には年末年始の三ヶ日、正月四日間、家の中に酒を置いてても飲んでもいけないというしきたりがある。だが、デモクラシーのこの世の中、こんな理不尽な迷信を後生大事に守っていく必要はない。わしは、この家のしきたりを今日からきっぱりと捨てる。」

こう宣言して、近代主義者の祖父は平安時代の終わりごろから続いてきたという我が家のしきたりを破ったのだった。

そのしきたりの由来はこうである。

——慈円が『愚管抄』で「乱世」とも「武者の世」となったとも嘆いた「保元の乱」（一一五六年）で、わが家の先祖鎌田正清は主君源義朝とともに後白河天皇側に付き、勝利を収めた。しかし、その後の処遇に不満を抱いていたという源義朝は、三年後の平時元年（一一五九）、ライバルの平清盛が熊野詣に出かけている間にクーデターを起こし、一条天皇と三種の神機を拉致し、政権を奪取したかに見えたが、その知らせを聞いて急ぎ取って返した平清盛軍との戦いに敗れて、敗走。次々とわが子を失いながら（悪源太原義平、源朝長、源頼朝【ただし行方

不明)、最期は鎌田正清の妻の父の平(長田)忠致に騙し討ちにあつて殺された。その際、源義朝は風呂場で、鎌田正清は酒に酔わされて殺されたという。それが年末から正月にかけての出来事だった。

そこで、その子孫の鎌田家は、以来、正月に酒を神棚に供えることも、また飲むことも禁じて、今日に至った。その禁を破ると、考えられない不幸や災難に見舞われる。――

これが、「酒なし正月」の鎌田家の掟となり、それをこれまで守り続けてきたのだった。それを大正十二年の正月に祖父が破り、その年の九月一日に関東大震災が起こり、わが家が破産の憂き目にあつたのだった。

それは、母が生まれる一年ほど前のことであつた。

母鎌田フミヨは、大正十四(一九二五)年一月十日に父藤七、母キクの五女として生まれた。母は家が破産した貧乏のどん底で生まれたのだった。

尋常小学校を出て、彼女は北海道十勝の叔父(父鎌田藤七の弟鎌田幸重)の家に預けられ、叔父の家の手伝いをしながら、ごくごくつましい花嫁修業のようなことをしていた。

しかし、戦後、兄が急死し、急ぎ郷里に戻り、家を相続することになり、あこがれの君の田中義美と結婚した。

その義美が「酔つて、転んで、死ぬ。」ことになった昭和四十六年という年の正月元旦、知り合いの人が、わが家のしきたりのことを知らずに、正月に我が家に酒を持ってきたという。母はこのことを大変気にかけた。父はそれほどでもなかった。

しかし、母の不安は的中することになる。その年の三月十七日の深夜のオートバイ事故で。

昭和四十七年七月に我が家が徳島県下で一軒だけ集中豪雨のため山崩れに呑み込まれて全壊した出来事が起こった年の正月にも、ある人が正月に我が家に酒を持ってきた。母は大慌てで制止したが、遅かった。気が気でなかった母の不安は的中した。我が家は家もなく、金もない家となった。

私はこの時に、金輪際無心はできないと悟ったのだが、その後も、ことあるごとに母の脛を齧りつづけたのである。無法者、非人情者、どこにも「ケアのこころ」などいっぺんもない。ただの無法無頼無礼な若者にすぎなかった。

ただし、七十三歳の今に至るまで、正月に神棚に酒を備えたことも飲んだこともない。もつとも今では一年中「酒なし正月」。一滴も酒を飲まない生活がつづいているが。

「たたり」というもののものふかさを私はかんじる。

## 冬の星座

母鎌田フミヨは平成十九（二〇〇七）年二月二十六日午後参時三十五分、徳島県阿南市の共栄病院で死んだ。行年八十二歳。死因は膵臓癌。体調が思わしくないので検査したところ、膵臓癌が見つかり、ちょうど一ヶ月後

に死去した。

母が死ぬ一週間前、仕事で徳島に行くことになった。一泊二日の滞在予定で、徳島市内のホテルを取ることになったのだが、それを断って、一夜、母の病室に泊まることにした。

近くの阿南市羽ノ浦町には姉家族が住んでいる。姉の車に乗って、共栄病院を訪ねた。妻（旧姓山岸左紀子）も合流して、その夜母と面会してくれ、ほどなくしてその日の内に埼玉県大宮の実家に帰った。

一人だけ残り、一夜を母と過ごした。母のベッドの近くに仮眠できる簡易ベッドを持ち込み、横になった。荒い息を吐き、黄疸の症状が出て、苦しそうであったが、朝起きると、逆に私を気遣って言葉をかけてくれた。「忙しい時によく来てくれたの。眠れたけ？」

「うん。大丈夫だよ。来れてよかったよ。」

その前の夜、母は、姉や妻や私を前にして、別れの言葉を吐き出すかのように言った。「いよいよじゃ。」

それは、死を覚悟した言葉で、なぜが武士が戦場に出ていく前に言う言葉のような気がした。母はサムライなのか？

晩年の母は、桑野町の山路一七から光源寺四十三に引越して兄家族とともにおだやかに「いんきよ」で暮らしていた。兄家族が住む母屋ではなく、短い橋でつないだ独立した二階建ての家屋だったから、気兼ねせず自分のペースで生活をいとなめただろう。

時に畑を耕して作物をつくり、山に行つて蜜柑や葡萄などを取つてちよくちよく私たちに送つてくれるのだった。

そして、周りに何度か言っていたそうだ。「いまがいちばんしあわせじゃ。」

姉と妻と母と私の四人の病室にいた時、私は心の中で「ありがとうね。」と繰り返していたが、姉の前でも妻の前でもなぜか気後れしてしまつて直接母に『ありがとうね。ぼくをうんでくれて。』と言うことができなかつた。

大学生のある冬の日、母から荷物が届いた。いつものように、お米や野菜やお菓子のほかに、幼い字の鉛筆書きで書かれた手紙と仕送りのお金が入っていた。

その手紙に、つぎの一文があつた。

「人に笑われない、立派な人間になつてください。」

そのことばは、私の肺腑をつらぬいた。

しかし、私は同意できなかつた。むりだよ、かあさん、おれには。

そして、覚悟した。

「ぼくは、人に笑われるリツパなニンゲンになる！」

以来、そのことばを自分への戒めとして生きてきた。

翌日、仕事を終えて、徳島空港から羽田空港まで飛び、そこから大宮に帰った。東京の夜景が涙ににじんで見えた。飛行機の中で私は「かあさん、ありがとう。ありがとう。ありがとう。」とひたすら呪文のように唱え続けていた。

羽田空港について、姉に電話した。「おかあさんに『ありがとう』と言っといて。」と。

自分では言うことができず、姉に言わせた卑怯な自分。カマタトージよ、自分で言えよ、それくらい！

だが、言えなかった。

大宮の妻の実家への家路を辿り、櫛引氷川神社に立ち寄り、祈りを捧げた。

見上げると、冬の星座、オリオンの三ツ星が耀いていた。かあさん、ありがとう。ぼくは、かあさんの子でよかったよ。

それからちやうど一週間後母が死んだ。桑野町の母と兄たちの家で行なわれた葬儀の最後の親族挨拶で、私は叫ぶように何度も泣きながら、「おかあさん、ありがとう。ありがとう。ありがとう！」と叫んでいた。最後の最後まで素直でない、世間体をまったく気にしない困らせた息子だったね、かあさん。

一九八二年八月、デルフォイの神殿に立った。

雲一つない抜けるように蒼い空。どこまでもその蒼の中に墜ちていくような。

かつて古代ギリシャのアポロン神殿のあったその場所は、今は神託も信託も託される何もものもなく、真昼間の何一つ翳りのない陽光の中で明るい廃墟であるばかりだった。

その昔、アポロン神殿の権威はギリシャ全土に広がり、汝自身を知れの格言が神殿の額に掲げられていたという。今はちらほらと観光客はいたが、それほどの数ではない。強い日差しの中で緩慢に移動する人びと。

地形を見回し、アポロン神殿の脇からバルナツソスの山に登った。山頂で誰もいないのを確認して素裸になった。小学五年の時、『古事記』を読み、続けざまにすぐギリシャ神話を読んで以来、ギリシャに憧れていた。

そしていつしかギリシャに行ったら、その輝くばかりの陽光の下で真裸になってその光を一身に受けたいと思いついてきた。三十一歳の夏、その子供の頃からの願望を達成した。

素っ裸で祝詞を奏上し、龍笛を奏でた。その時、ダダンダダンと空が鳴った。ダイナマイトでも仕掛けて山を爆破しているかのような。おそらく観光客相手のリゾートホテルを建てるために山を切り崩しているのだろう。そう思うとむしよやかになくなつた。

たった一人の儀式を終えて、宿の近くのタベルナに入って遅い昼食を摂ろうとした。

途端、これまで経験したことのないスコールが襲つてきた。篠突く雨というか、爆弾のような、連射砲のような雷雨。

その時、強烈な閃光が走り、しばらくして物凄い音響がダダンダダンと空に鳴り響いた。カミナリだった。身震いするほどそそけだった。

その夜、夢を見た。

泉の前に立っていた。

泉から金色の湯煙が立ち上ってくる。

そこに近づき、飛び込んでいきたい気持ちがあるが、恐れ多いような、神々しいような畏怖の念を感じて佇んでいた。



その時、金の泉の中から声が聞こえてきた。

「美しいものを美しいものとして見るのではなく、醜いものを醜いものとして見るのでもなく、ただありのままに見つめよ」

そして、予言の言葉が続いた。

何処から来て何処へ行くのか。

その道筋を示す言葉を得て慄然とし、ありのままに見つめることを座右の銘とするほかなかった。行き先は不明でもその流れに乗るほかなかったのだ。

## 空海とヘルダーリン

吾が研究の出発点に空海が居る。問題の核心は、神秘体験と詩と救済、である。

空海の処女作『三教指帰（原題は「聾瞽指帰」）』には、四篇の自作「詩」が記されている。紫式部の『源氏物語』が「歌物語」であるとするれば、空海の『三教指帰』は「詩物語」である。『源氏物語』全篇の和歌数は795首、空海の『三教指帰』は漢詩4首にすぎないが、しかし、その「詩」の重要性では「歌物語」である『源氏物語』に匹敵する。

空海は主要な重要命題をすべて「漢詩」で表現したのだ。主著である『即身成仏義』『声字実相義』『叶字儀』

『秘蔵宝鑑』『般若心経秘鍵』、すべて同様である。肝心要の核心を「詩」で表わしたのだ。

本『あごら』53・54頁で、鶴岡賀雄は十字架のヨハネの詩と思想との不可分離性を次のように述べている。長文だが、最重要な箇所なのでその部分の全文を引いておく。

「十字架のヨハネにおいては、その神秘思想はまず「詩」として言語化された。言語以前の体験・経験の地平を文字通り言外に想定するとして、そしてそこにこそ「神秘」の実質があるとして、その実質にいちばん近い言葉、実質から最短距離で言葉になったものが彼の詩だった。このことは彼の生涯の歩みからもたどられるのだが、著作の形態、形式自体に端的に現れている。十字架のヨハネのまとまった著作である『カルメル山登攀』、『暗夜』、『霊の賛歌』、『愛の生ける炎』の四編は、すべてが自作の詩（上に私訳を掲げた）の「解明（declaración）」として著されているのである（『カルメル山登攀』と『暗夜』は、ともに「暗い夜」の解明）。

いずれの著作でも、まず冒頭に、解明される詩の全体が掲げられる。その上で、「連」ごとに順を追って解明がなされていくのだが、その都度、解明される連が掲げられ、さらにほぼ一行ごとに、そこに込められている「意味」が、修道者が神との合一の道行きの途次に経験するさまざまな心理状態やその神学的意味として説き明かされている。そしてこれが、彼の神秘思想の表明となっていく、という次第である。つまり、彼の神秘思想とは、まず詩として言語化され、その詩の言葉に結晶した神秘的合一の境地が、詩の言葉の解明というかたちで、知的に了解可能な理論言語の地平に開き陳べられたものなのである。とともに、こうして解明されることで、詩的感興は生みつつもその意味の知的な了解はできなかつた詩に理論的・思想的意味が充当されて、詩の言葉の新たな読みが可能になる、という一種の循環的效果が生まれる。そしてその循環がさらに、詩の言葉がそこから生まれてきた言語以前の、神秘的合一の境地そのものをなんらか感知させる、という効果が期待されている。こうした、「言語以前の神

秘」⇔「詩の言葉」⇔「解明（理論）の言葉」という、言葉の三次元の往還自体が十字架のヨハネの神秘思想の基本構造でもあり、彼が「詩人神秘家」と呼ばれてよい所以となっている。」

この十字架のヨハネに対する鶴岡賀雄の評言と要点整理は、まったく空海そのものの真髓を言い表しているのだ。鶴岡の言葉は、空海その人のありようと著作のスタイルを完璧に言い当てている。

こうして、わが卒業論文「東洋と西洋における神秘主義の基礎的問題への試論」（主査…三枝充恵、副査…藤田富雄）における空海とヤコブ・ベーメの神秘体験と言語哲学の比較と、補論としてW・B・イエイツの詩と民俗研究と霊媒的ヴィジョンの描出やアルチュール・ランボアの詩と「見者」の思想の考察は、73歳のこの『あごら』創刊号において、次なる検証のステージIV?に入ったのである。

三枝さん、あなたは、わたしの卒業論文を「偉大なる失敗作」と評しましたが、わたしはそうはおもっていません。吾が卒業論文は「偉大なる耕作」でした。

空海は、「三教指帰」の最終章「仮名乞児論」で次の四篇の詩を載せている。

- ① 「懷写頌」 10行
- ② 「無常賦（受報詞）」 58行
- ③ 「生死海賦（大菩薩果）」 40行×2||80行
- ④ 「十韻詩（詠三教）」 10行

次号で詳しく述べていくが、空海のこの「詩」作は傑出している。その「詩作」の重要性については、『性霊集』と題してまとめられた漢詩集を持つ空海であるから、これまでいろいろな空海研究者が指摘してきたことではある。が、しかし、その「詩」の意味と空海密教思想との相互関連性については、残念ながら、まだほとんど詳細に検証されていない。残る人生の一部をその検証と説明に当てたい。

空海はン、待つとくんはなれ！

さて、ヘルダーリンである。空海とヘルダーリンに共通するところ、それは巨大な天然自然（それをのちに「空海」と総称）の「カミナリ」に撃たれていることである。

空海は、『三教指帰』「生死海賦」に次のように記している。

嗒々**雷霆**日日已衆　嗒々（かいかい）として霆（いかづち）のごとく響いて、日に日に已に衆（おお）く  
轡々**雷霆**夜々既充　轡々（りりん）として雷（らい）のごとく震（ふる）うて、夜な夜な既に充てり

「霆・雷」という「カミナリ」に貫かれたのだ、空海は。若き山林修行者として、吉野や熊野や四国の山野を跋渉し、虚空蔵求聞持法を修しながら。

ヘルダーリンは「あたかも祭りの日に」に記す。

かくして今や危険もなく

大地の息子らは天の焰を飲む。

だがわれらに相応しいのは、おお、詩人たちよ！

**神の雷雨のただ中に、頭を曝して立ち、**

父の光りを、それそのものを、手ずから

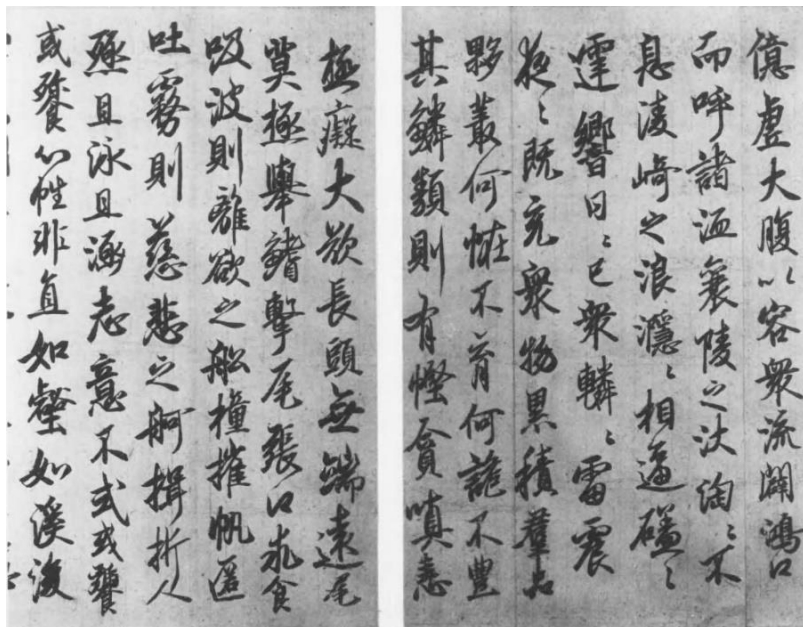
掴み、そして歌にくるんで

民に天の賜物を頒つことである。

(『ヘルダーリン全集 詩Ⅱ 1800 - 1843 2』148頁、手塚富雄訳、河出書房新社、1966年初版、2007年新装版)

Und daher trinken himmlisches Feuer jetzt  
 Die Erdensöhne ohne Gefahr.  
 Doch uns gebührt es, unter Gottes Gewittern,  
 Ihr Dichter! mit entblößtem Haupte zu stehen,  
 Des Vaters Strahl, ihn selbst, mit eigner Hand  
 Zu fassen und dem Volk ins Lied  
 Gehüllt die himmlische Gabe zu reichen.  
 Denn sind nur reinen Herzens,  
 Wie Kinder, wir, sind schuldlos unsere Hände,

かくして今や危険もなく  
 大地の息子らは天の焰を飲む。  
 だがわれらに相応しいのは、おお、詩人たちよ！  
 神の雷雨のただ中に、頭を曝して立ち、  
 父の光りを、それそのものを、手ずから  
 掴み、そして歌にくるんで  
 民に天の賜物を頒つことである。  
 子供らのように、われらもひたすら純なる心を  
 もっているのです、われらの手に罪はないのだ。



## 【訳者前言】

カール・グスタフ・カールス (Carl Gustav Carus 一七八九-一八六九) は、医学者、解剖学者、心理学者、自然哲学者、K・D・フリードリヒ門下の画家であり、ドイツ自然科学アカデミーの会長を務めるなど、科学者としての名声を極めた研究者であった。他方で、通常ドイツ・ロマン主義を代表する存在のひとつとも目されるカールスの自然研究の理念的前提はゲーテとシェリングであり、形而上学的思想枠組みとの混交が見られるその科学・医学面での業績は、長く顧みられることもなかった。しかし本書『プシュケー』を代表とする心理学関連の業績については、深層心理学やホリスティック医学を先取りした内容をもつものとして、折々言及がなされてきた。

「無意識 (das Unbewusste)」は、すでに一八世紀末から用例があり、カールスが創出した概念ではない。しかし『プシュケー』は、この概念を中心的概念として考察を展開し、無意識の多次元的な位相を正面から捉えようとした歴史上はじめての著作であった。フロイト以降の無意識心理学は、カールスや他のロマン主義心理学者の無意識論を前科学的な業績として背景に押しやることによって、そこから受けた影響の痕跡を消し去ろうと努めた(特にフロイトにはカールスへの言及が一切ないが、フロイトの蔵書に数多くのカールスの著作があったことが確認されている)。

この「前科学」性というのは、カールスらの心理学論の形而上学的な性格ということにある。カールスは経験科学者であり、また精神医療をも含めた臨床医としての豊かな経験をもっていた。他方でカールスは、まだ唯物論的自然主義が内化され、形而上学が放逐される前の時代の知識人であった。世界の存在と(画家としても見た)

自然の崇高美、比較解剖学者として接した生物の精妙極まりない構造、多様な生命体の進化と動物性を越えた理念認識にまで到達した人間の出現、人間の心性の複雑さと無意識的諸現象のダイナミズム、当時のことばに言う「自然の昼の面」と「自然の夜の面」のすべて、こうした事々への驚異の念を、カールスは素直に受け止め、またその全体を関連づける全体論的形而上学の確立を目指した。

カールスは、全実在を生ける統一体と見るとともに、それを「神的なるもの」||「存在する世界」と、「生成する世界」の二つの存在層に分ける。「イデー」は「神の思考内容」とも言われ、質料因である生成する世界に形相として規定的に働く。この結合体をエーテル実体が支えて時空間と物質性ある宇宙や自然世界が生じ、その中で生命の発展史（||イデーの展開）が生起する。人間はその精華として、神的なるもの間接的認識（例外的な場合には直接的体験）が可能なる存在として出現した。人間の魂||心性は、地上の生命体としてはもつとも明晰な意識性や反省性をもっているが、他方で忘却し抑圧した心的内容から成る無意識、心性を支える身体は無意識的作動、その根底にある物質性一般や「生成する世界」の無意識的生命、人間が認知しえないという意味でのイデーや神的なるもの自体||「絶対的無意識」など、多重的な無意識の基盤のうえで機能している。人間の魂は、その現象的現れを超えたイデー的存在性をももち、全体生命の一部として死後も失われることはないというのが、カールスの認識である。「プシユケー」は、言うまでもなく、氣息、生命を原義としている。

こうした思想枠組みにある種の経験的基盤を与えたのが、一八世紀末からヨーロッパ社会に治療術として流行し、次第にさまざまな心的解離や超心理学的事象を引き起こす催眠トランスの実践||実験として哲学者たちの注目をも集めるようになったメスメリズム（別名「動物磁気」「生命磁気」）である。フィヒテ、シェリングなどもそうした実践の現場に足を運んだが、カールスは医師として、より密接にそうした事象を観察する立場にあった。この面でのカールスの考察の集大成が一八五七年刊の『生命磁気とそのマジア的作用一般について』(Über



*Lebensmagnetismus und über die magischen Wirkungen überhaupt*)である。なお精神分析との関わりでは、カールスが意識内容の忘却と抑圧、その無意識内における存続、治療場面における転移関係の意義などについて、フロイトを先取りしていたとの指摘もある。

ヘーゲルとショーペンハウアーを総合し、またカールスらロマン主義心理学をも土台として書かれ、一大センセーションを引き起こしたエドゥアルト・フォン・ハルトマンの『無意識の哲学』(*Philosophie des Unbewußten*) (初版一八六九年)が出たあと、ドイツ自然哲学・形而上学の時代は終焉へと向かった。シャルコー、ベルネームらにおいては、催眠療法は形而上学からは切り離されたが、なおカールスは意義ある存在として影響力をもっていた。しかし両者のもとで学んだフロイトは、催眠療法を放棄して自由連想法に切り替え、無意識心理学をいわばリセットし、無意識の発見者を僭称した。こうしてカールスは思想界から忘却されることとなった。ユングは、ごくわずかにカールスの名に言及するのみだが、その普遍的無意識や元型の発想がカールスを有力な淵源としていることは、今では周知となっている。

一九二〇年代から三〇年代にかけて、特異な心理学者・性格学者であるルートヴィヒ・クラージェスがカールスを生の哲学のバイオニアとして高く評価し、『プシケ』の短縮版を編集・刊行した。またクラージェスの弟子にあたるクリストフ・ベルノウリやハンス・ケルンが、カールス研究やカールスのアンソロジーを出版するなど、カールス復権の動きもあった。しかしクラージェスの反ユダヤ主義的言動や、とりわけケルンによるドイツ民族主義宗教運動とロマン主義心理学との結びつけなどが災いしたこともあり、第二次大戦後はふたたびカールスは忘れられた存在となった。もつとも近年は、カールスを含めたロマン主義周辺の深層心理学やエソテリシズムに関わる思想的研究がある程度活況を呈し、また二〇〇九年にはドレスデン国立美術館で「カール・グスタフ・カールス―自然とイデー」と題する絵画・資料展が開かれ、二巻本の大部のカタログも刊行されている。

【凡例】

- ・ 本訳の底本は、*Psyche. Zur Entwicklungsgeschichte der Seele*, 2. verbesserte und vermehrte Auflage, Stuttgart: C. P. Scheidin's Verlagsbuchhandlung, 1851 ㄹㄹㄹ。
- ・ 太字体は、原文強調箇所である。
- ・ 「魂」の原語は、*Seele*であるが、この語は「心」「心性」とも訳しうる。訳し分けることも不可能ではないが、いづれにせよカールスの言う心性は神的イデーにまで繋がる生命実体でもあるので、「魂」の訳語で統一した。――箇所「心性」と訳した箇所の原語は *Psyche* である。
- ・ 原文の注は脚注とし、訳注は文中に挿入した。

**プシユケー――魂の発展史のために――**

**カール・グスタフ・カールス**

目次

- I 魂の無意識的生について
  - a 人間の組織の最初の形成過程の本質について

- b イデーの無意識の作用によりなされる最初の組織のさまざまな系への分化について
- c 種の内部で個体が多数化される諸過程における本質的に無意識なるものについて
- d 自己自身を意識化した魂において常になお無意識の領域に属するものについて
- e 無意識的な魂の生において病的な状態の際に生じるものについて

## II 魂の意識的生について

- a 無意識からの意識の最初の形成について
  - (1) 動物における魂の形成について
  - (2) 幼児における魂と精神の形成について
- b 魂の無意識の生による魂の意識的な生への継続的な制約について
- c 意識的な魂の生がいかに無意識的なそれに作用する仕方について
- d 意識的な魂の生の無意識的なそれへの還帰について
- e 生の内化と外化による魂の生の生長について
- f 魂の人格と性格への形成、および魂の多様性について
- g 魂の生のさまざまな発露について

### ① 感情の歴史について

- (1) 喜びの歴史
- (2) 悲しみの歴史

## 序

### III 魂の無意識と意識における過ぎゆくものと永遠なるものについて

- ③ 精神における病的現象をめぐる特別な考察
- ② 魂の病について
- ① 魂の健康について
  - i 魂の健康と病について
    - (3) 魂と神との関係について
    - (2) 魂と自然との関係について
    - (1) 魂と他の魂との関係について
  - h 魂と他の魂、自然、神との関係について
    - ③ 意欲の歴史について
    - ② 認識の歴史について
    - (5) 心情の平静状態について
    - (4) 憎しみの歴史
    - (3) 愛の歴史

意識ある魂の生の本質を認識するための鍵は、無意識の領域にある。すべて魂の秘密の真なる理解が困難であり、不可能とも見える所以は、ここから明らかとなる。意識的なものなかに無意識的なものを見出すことがまったく不可能であるならば、人間はみずからの魂の認識、すなわち本来の意味での自己認識に至ることを諦めねばならないだろう。しかしこの不可能性がただうわべだけのものであるならば、魂の学の第一の課題は人間精神がいかにしてこの深みへと降り立ってゆくかを詳述することにある。

とはいえ、これを試みるまえにまず考察しなければならぬのは、無意識的な魂の生は、一体どの程度まで実際に意識的な魂の生の基盤であるのか、との問いである。

私たちの魂の生の領域の圧倒的に大きな部分が、持続的に無意識のうちにあることは、内的生を一瞥しただけで分かる。私たちはつねに、ほんのいくつかの少数の表象を現に意識している一方で、幾千もの表象を保持しているが、それらはまったく意識から遠ざけられている。それらの表象は、その瞬間には意識されていないもの存在しており、したがってここから魂の生の大部分は無意識の夜に属することが理解される。のちに表象生活の注目すべき循環について述べる——これを私は、『生理学体系』において最初に心理学のうちに導入した——が、そこで私たちは、魂の生がこの点では絶え間なく前へ前へと渦巻いてゆく大いなる流れにも喩えられることを認識するだろう。この流れはただいくつかの小さな場所においてのみ陽の光に、すなわち意識に照らされるのだ。したがって、私たちの意識の大部分の思念が繰り返し無意識のうちに沈み、折々に、また個別にのみふたたび意識にのぼりうることからしても、無意識の魂の生は意識的なその基盤であると特徴づけられるのである。しかも、この関係は、なおはるかに深いところまで届いている。すべての魂の生、私たちの最も内奥の精神的現実存在の世界の総体を、私たちはみずからの意識においてあらゆる外的なものから区別するが、その魂の生は意識なき生のうえに置かれており、後者のなから形をなし、現れるのである。私たちの自己意識的な精神生活全体

の生育をほんの一瞥するならば、いやが応にも、その精神生活が徹頭徹尾、とつくに私たちにとつては存在せず、つとに無意識の沈んだ表象や思念の基礎のうえに成り立っていることに気づかざるをえないだろう。幼い子供のとき、精神的な発達を遂げるために、私たちはそのときには不可欠であった表象や表象の帰結によつてものを考へることを学ぶが、それらの表象は今や私たちからはまったく消え去つた、失われたものであり、またそうでなければならなかつた。なぜなら私たちはそれらをもう必要としないからであり、そうした表象からまた新たなものが発展してゆかなければならないからだ。かつて意識的であつたものは、こうしていまや無意識的なものとなつたのだが、しかしだからといってそれが私たちの現在の意識の根底をなすことに変わりはない——したがつて、人間の魂が次第に成長してゆく仕方について私たちが確たる見通しを得られない限り、魂の生の秘密に迫ることはできないだろう。これについては、とりわけ三つの大きな生命期を確認しておく必要があるだろう。人間はすなわちまず、

- ・ 単なる微小な原細胞として、同心円を描く外被からなる卵子として出現し、次に
- ・ 卵子のうち成長するもの、すなわち胎児となり、最後に
- ・ 本来の人として、現れる。

最初のもものは、健全な母体の組織のもつとも隠された深みに誕生以来具わっている胚の、まったく潜在的な生存であり、母体の生となお切り離すことはできず、いかなる生命的变化も認めえず、数十年のあいだを通して常に同一のままにとどまり、したがつてそこには当然ながら高度な魂の生の表出の痕跡もまったくなくない。そののち、母体のそれとは反対の男性の魂による固有の生命的働きかけにより目覚めさせられると、第二の、母体内で成長

する子供の生命期が始まる。その最も固有の、無意識的な本性の瞳目すべき内的諸法則に従って、元来は単純であつたものが諸対立へと分節し、限りなく豊かな人間形成が形をなし、拡大してゆく。とはいえ——この形成はなお、成熟した人間の形成とは、非常にかけ離れている。

卵子のうちに芽生え、外被により覆われた胎児は、その後々の外界との相互作用のために定められた器官をなおすべて外被のうちに向けている。この生命期において胎児はこうした状態にあり、この卵の生み出したものに何らかの意識の目覚めを示すものは何もない。したがって私たちの成熟した魂のうちには、この生存の何らかの記憶、私たちの第二の生命期の想起と呼びうるものは、皆無である。神の火花の、かの内的な原像のあらゆる現実存在、あらゆる作用はなお自己を觀るまでには目覚めておらず、今はなおただ秘密に満ちた創造作用をなすものたるにとどまっている。この創造的なるものは、無意識のうちにあるとはいえ、このうえなく英知に満ち、驚くべき法則に従って、先へ先へと形成し、形づくる生命である。この生命は、それがより明瞭に認識されるならば、より一層心性の高次の啓示の奇跡の理解をもたらすものであり、これについては拙著『ピュシス』〔*Physis. Zur Geschichte des leiblichen Lebens*, 1851〕において叙述したところである。同書は、本書を徹底的に補足するものとして書かれている。

**第三の、本来の人間としての生命期は、**誕生とともに始まり、その有機組織をもつて今や広大な外界と多様な相互作用のうちに立つとともに、次第に暗い、それまで意識を欠いていた魂の領域に、自らの存在と外なる存在とのあいだのかすかな区別が兆し、そして徐々に、また周期的に無意識的な生命へと沈むことを繰り返しながら、生の成熟が近づくとともに、意識的な、感じ、意志し、認識する魂が、それ以前の意識なき状態から発展して行く。

以上が、人間として、魂としての私たちの発展の本質のごく簡略な概要である。私たちが厳密にこれに関わる

認識にこだわり、これについて何らかの恣意的な考えを付け加えることを戒め、私たちが忠実かつ忍耐強くみずからのうちに観入り、そして——このように私は言いたいのだが——私たちの意識的な存在から無意識へと遡って**私たちの現実存在を精神的に再構成**するとき、そのときにのみ、私たちは本書の冒頭で意識的な魂の生の認識への鍵と呼んだものを見出す望みをもつことができる。すなわち、**意識を通じて無意識を理解**する、ということである。このような考察方法は、困難ではあるが、しかし不可能ではない。その際私たちは、身体的なものについてと同様の手順で、精神的なものについても考察したい。すなわち、自身が生きてきながらも知るに至っていない有機組織的展開を、私たちは自分以外のものの観察によって考究し、知るに至る。本研究においても、私たちはこの方法に従うことにした。

昔日の探求者は、アリストテレスをはじめとして、人間の意識無き分節化と発展の組織的過程については、なおほとんど知見をもたなかったが、近年の研究者とくらべてはるかに忠実にこの方法に従っていた。彼らにとっては、魂は常にまず生命あるものを構築し、形成し、養う存在であり、その存在のなかでは、認識はいつものちになって初めて発達するものであった。アリストテレスは素晴らしいことばを残している。曰く、「**魂は、おのずと分化してゆく身体、最初の實在である**」<sup>30</sup>。

こうした教えのうちに錯誤と不調和が入り込んだのは、人が生命と魂を分離し、そして生命そのものについて混乱を極めた概念を持ち込んだことに始まる。一七世紀終りのF・ホフマン(Friedrich Hoffmann, 1660-1742)ドイツの著名な医学者」の生理学の見解によれば、植物は心臓を持たないので生命ではない。こうした見解が当時支持を得たことを考えるならば、動物に魂があるのか、子供にいつ魂が外から宿るのか、などといったことが論争の種となったことも分かるし、またいわゆる生命力なる機械仕掛けの神を考え出して、その全能性のうちから生体が成立し自己維持し、その一方で魂はあとからこの外被に入り込んだ異物に過ぎないと見なされねばならな



かったことも理解できる。これはまた明らかに部分的には、暗冥な精神の持ち主の誤解に基づく神学的観点によるものでもあった。つまり、私たちの内で感じたり思惟したりするものがまた私たちの形成と生長作用をも司るとの考えを、こうした結びつけは、魂の不死性を主張する根拠を不可能なものとする冒瀆である、とこの観点はみなしたのであった。このゆえに、私たちの身体の組織が発展するためには、魂以外のものが活動しなければならぬと考えられたのであり、また動物には、すくなくともより未完成なそれには魂があるのか否かという問いも生じ、さらには植物にはほとんど生命をほとんど認めがたいとしたために、植物魂など問題にならないとされたのである。こうした過去を思うにつけ、より以前のはるかに厳密な神学者——ここではトマス・アキナス<sup>3</sup>を挙げるにとどめるが——のことを思わざるをえない。トマスは魂に、ひとつの方向から見れば終極的なもの、すなわち認識を帰するとともに、同時に他の方向では第一のもの、すなわち生長作用と形成を認めることに、何らの抵抗も覚えなかつたのであった。というのも、こうした神学者たちは、彼らがあらかじめ次のことを予感していたがゆえに、そこに不死性の教説との矛盾など見なかつたからである。その予感とは、私たちが死と呼ぶものを通じて、ともかくも組織形成とともに規定してきた魂のうちに生じるのは、魂の生の単なる変容、すなわちそのひとつの方向の終息というだけで、決して魂の根本的イデーのまったく消滅なのではない、というものであった。

しかしながらこのこと〔魂と生命との分離〕は、魂を身体の自然な分化の最初の実在として認めることを妨げた理由の一端にすぎない。他方においては、無意識的なものと意識的なものとの間を分ける壁こそが、全く意識の外にあるものを魂の領域から切り離してしまうようにと人々を促したのだ。つまり私たちは、自分がいかに発生し、いかに生長し、内的にいかに養われ、また作り変えられたかについては意識をもたない一方で、私たちのうちにある感覚印象や表象や意志作用と呼ばれるものについては意識があるために、私たちは後者の諸過程だけ

が本当に魂に属するものだと考え、これに対し他のすべては魂では説明不可能なものとして、何か特別な働きかけ、特殊な知られざる潜在力、いわゆる生命力に帰してしまふのだ。

意識、明澄な思念、あるいは少なくとも明瞭な感覚表象を持ち、またそれによって規定される能力を暗黙のうちに魂の信任状とすることに誤りはないとされたため、こうした能力を欠いたものは魂と見なされえなかつたのである。

しかしこうした錯誤に身を委ね、身体組織の形成と生長の過程のために固有の生命力を想定し、また感覚と認識と意欲のために固有の魂を想定することはどのような結果を生み出したであろうか。人は二つの異なる魂、あるいは二つの本質的に異なる根本的力を、その生成からしても、生命のあり方からしても、自己感情においても一体であることが否定しえないものに持ち込んでしまうこととなつたのだ。その何ものかを生命力と呼ぶにせよ、形成衝動と呼ぶにせよ、常に、またそのあらゆる外化において、それは外から動かされるものではなくそれ自身の中から動くものでなければならぬのであり、そうなるたまさにそれは神性に与るものと言わねばならないこととなる。なぜなら神的なものはいずれにおいても、動かされるのではなく、自分自身の内から自分自身と他のものとを動かすというのがその特性だからである。魂そのものについて、本質的にこれと異なることを言うことはできないのであつて、もし生命力と魂との間の関係について堅持しようするような区別にたどり着くためのメルクマールを求めるならば、永遠の循環に陥つてしまうことが容易に見て取れる。生命力は、それを微細なものと考えようが、あるいはより粗大なものと考えようが、つねにそれ自身からのみ動くものであり、個別的なものであり、神的なるものの氣息によつてのみ駆り立てられるもの、一言で言えば、魂たるにとどまる。魂を思考のうえで触知しうる組織からいかに切り離そうとも、また有機組織的な生と呼ぶものから区別しようとも、私たちの意識においてそれはこの上なく精妙に私たちの生のあらゆる形式と結びついて現れるのであり、それゆえ實際

に生理学者の中には、結局のところ魂は単に高められ、そのもつとも高次の作用性として表れた生命力にほかならないとの自然な仮定へと行き着いた者もいた。神のイデーそのものによる生の創造の無くしてはいかなる生命力もないし、またありえないということを洞察するや否や、これに対してはいかなる反論もなしえないだろう。

私たちの全存在の根底にある本質の二元性ならぬ**一体性を把握し、また精確に証示するためには、これに加えて、なおもうひとつのことがらに注意する必要がある。**すなわち、魂と、形成し養う生命の諸過程を条件づけるものとの差異を証明することとして、その生命から意識へと到達するものなどないとの事実を引き合いに出すのならば、次のことが忘れられている。つまり確かに身体組織のうちで生じることの多くは、それそのものとしてありのまま直接に意識に達することはないが、しかし身体組織で成長・成立する際の、まったく無意識になされる影響を及ぼさないことなどないのである。胎児のときに身体組織が成長・成立する際の、まったく無意識になされた諸過程でさえもみな、意識と関係があると言えないだろうか。なぜならそれらの諸過程は、やがて表象を受容し、保持し、変容せしめる諸器官を創り出すのであるから。このことは、意識的となった人間における部分的に無意識的な諸過程としてのちに言及する、血液循環や成長や分泌などについて、より以上にあてはまる。なぜならそうした諸過程は、人間の意識に**間接的に影響を及ぼし、また病的状態においては直接的に意識の表象しうる**ところとなる場合も多いのではないだろうか。——こうした関連からしても、魂と生命力との間を隔てる不動の壁を探すがむなししいことが分かる。もしこれら両者のエネルギーが本当にあらゆる意味で異なるものであるとするならば、感覚器官が受け取ったものが精神に働きかけ、精神そのものはまた身体の形成に作用するなどということは、そもそも不可能となるであろう。それと同じように、すべてのことが**次の点を示唆している**ことは**確実であろう。つまりただ唯一の生けるものの原理が、自己自身からみずからを動かすものだけが**—アリストテレスがエンテレキーと呼び、プラトンがイデアと呼ぶもの、プシユケー、魂など何と呼んでもいいが、一言で呼

べば**神的なるもの**——あらゆる生命現象の、したがってあらゆる形成作用の根本的条件たりうるのだ。

この際、この秘められた生の原理にたいしては、呼吸や氣息を意味する言葉、たとえば *anima*、*spiritus*、*pneuma* などが当てられることがほとんど常であることに注目がなされ、またそこから、もつとも持続的で休みなき生命現象としての呼吸にこの比喩的名称は由来するのだと信じられてきた。私はこれに加えて、こうした名称の選択には、なお別の意味もあるものと推測している。すでに『創世記』の非常に注目すべき箇所「その鼻に息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(『創世記』二・七、新共同訳)は、明らかにこの意味で言われており、また「靈感」「靈感を受けた」などもここに関係づけることができる(ともに原語は *spiritus* と語源的に關係している)。こうした表象の仕方は、次のような考え方と非常に見事に結びついている。すなわち、生命あるものからまたこの**神的氣息**は聞き取り可能な形で、行為と言葉における**神的なもの**として再び響き出てくる——貫き響いてくる——(古代の俳優の聲が仮面の下から出てくる *per-sonare* ように)のであり、そして生命あるものみが、私たちに高次の聞き取り(理性)〔ドイツ語の「理性」= *Vernunft* は「聞き取ること」をも意味する〕にみずからを規定せしめる個人の、つまりは**人格 (persona)**の概念を与えるとの考え方である。

こうしたすべては、次のことを示唆する。すなわち私たちはすべて何らかの生けるものの中に、一なるもの、命あるもの一般を規定するもの、命あるものの現実の根底であるものとして、**神的なるものを認める**。この**神的なるものを**、私たちはこの特有の現象の根元として、**その存在のイデー**ないし(このイデーのうちに何らかの種類**の意識**が芽生えるや否や)魂の名をもって呼ぶ。

現実には決して分かれることがありえないものを思惟の上で分けることを可能とする私たちの精神の能力は、あらゆる存在において、アリストテレスが語るような区分を行うことを許す。曰く、「一方には質料があり、それ自体は何らかの規定された何かではない。他方には形相と形象があり、これによってある何かは名づけられる。

そして第三に、形式ないし形象から成立するものがある。質料とは可能態であり、形相規定は現実態である」。かくして生命ある存在、すなわち自己自身より展開し、保持し、栄養摂取し、運動する存在が問題となるときには、私たちがその個別的存在の根底と見なしたあの神的なるものによってまず規定されたものは、つねに形式である。アリストテレスが正しくも対象の**現実態**と形容する形相Ⅱ形式規定は、確かに絶えず修正されながらも、本質においてはあの神的なるものによって生の全体を通じて堅持され、残存するものと見える。一方これに対しアリストテレスが**可能態**とよぶ質料は、絶えず変容し、つねに流失するものであり、いつも他のものによって補われねばならないものである。個別存在の根元を包含する神的なるものをイデーないし原型と呼ぼう。このイデーがそこに映ずる、つまり現象する可能的なものは、質料ないしエーテルと呼ばれよう。さらに、イデーが心魂的かつ身体的に生きる現実態は、形体と呼ぼう。こうして私たちはともかくもひとつの**生ける存在に三つの契機**を認めたことになる。その際注意せねばならないのは、私たちはこれらを悟性においてのみ異なるものとして区別できるのである。それらの間の客観的な分離ということは断じて想定してはならない、ということである。そこにみずから刻む何らかの質料なき形相や、イデーによる規定なき形体などというものは考えられない。何らかの形体無くして端的に存在する質料などというものもまた意味をなさない。何らかの形体において活性化し、写し取られないイデーないし原型は、そもそもいかなる存在ももちえない。まさにそれゆえに、イデーがそれ自体はありえないこうした区別を**思惟**しうるに至るということは、みずからを認識するイデーの最高の発展と見なされねばならない。またまさにそれゆえにまた、こうした思惟には大いなる危険がともなわれる。なぜなら、極めて容易に、人間はそうした思惟に何らかの現実性を与える誘惑にかられるからである。そうした際にはそれによつてただちに世界や人間自身についての混乱した、まったく不十分な表象が抱かれてしまうのだ。

こうした考察において同時に、まさに本来的に**人間的な**、あらゆる学問と生命との関わりにとつて、明瞭かつ





≡ 『魂について』第二巻、第一章。

≧ トマスは魂に、潜在的、植物的、感性的、知的、欲求的、意欲的なそれを区別した。

≨ これについては、プラトンの素晴らしいことばを参照（『ファイドロス』、二四五頁）「すべての魂は不死である。なぜなら常に動くものは不死である一方で、他の何かが動かし、他の何ものかによって動かされるもの、つまり運動の一端であるものは、生的一端でしかないからだ。かくしてただみずから動くもののみが、運動的であることを止めない。それは自分自身から離れることがないからである。他に動かされるものにとってそれは、運動の源泉であり始まりである。始まりというものはしかし、生成したものである。」「ない」。

≩ 意識と無意識を、通常魂と身体を鋭く対立させて考えるのと同じような仕方で分離しようとすることは、後者と同様に望ましいものでもなければ、成功の見込みもない、と言っているだろう。それはひとり人間全体をもつぱら覚醒した人間ともつぱら眠りにある人間とに分けるようなものである。両者は一体であって、またそうした一体性にあつてのみ、人間はあるときは前者として、あるときは後者として顕れることができるのである。

≪ 『魂について』(V. Weisse 訳)、第二巻、第一章。

## 編集後記

### 鶴岡賀雄

ヘルダーリンを読む会に誘われた事情は本誌所載の拙文に記したところだが、同人誌への展開も当然鎌田さんの発案で、凡人の発想を超速で越えていく構想力には今回も驚かされた。が、引っ張られてついでいくと、ひとり

では絶対行けないところまでいつも連れて行ってくれる。今回もそうだった。共同編集者というのは名ばかりで、編集の実務、作業は鎌田さんが一人でやってくれている。ありがとうございます。ときどき津城さんを交えた三人で詩と宗教をめぐる雑談まじりの研究鼎談をオンラインでやっていて、そこでの気儘な発言が刺激やヒントになってくれれば、わずかに「名ばかり編集人」としての責めをふさぐことになろうか、と思っています。

**津城寛文・匡徹** この雑誌の出発点である、「ヘルダーリンの詩を原語で読む」というオンライン研究会の通知メールが、主宰者から多くの〇〇であったとき、反射的に「これは私には無理だな!」と思った。返信せず放っておいたら、しばらくして「ぜひ」という名ざしの追伸があり、ドイツ語もともに読めない身で、好奇心半分、羞恥心半分、参加者の末席に連なることになった。結果的には、とくにハイデッガーのヘルダーリン論が、現在進行中の論考にとって、たいへん参考になった。創刊号は、論考から、創作、翻訳、解説まで、最先端の話題が目白押しで、読者は、目眩めく思いになるだろう。今回は寄稿しておられない、加藤敏先生の「狂気内包性思想」論も、次号（以降）でさらに展開していただけるのを、楽しみにしている。

**鎌田東二** ヘルダーリンの「カミナリ」に撃たれた。ただその一言に尽きる。わが脳髓に天宙から「カミナリ」のエネルギーとメッセージがたらぬき充ちた。そこからヘルダーリンを改めて読み始めたら、ビンビン、ガンガン、グングン来るのではないか。これは何? 何事? 何者? 何ゆえ? というわけで、2023年9月にヘルダーリン研究会を結成し、このたびヘルダーリン同人誌『あごら』を創刊することになった。その編集作業は鎌田が一人で務めているが、目に見えないいろんな手助けをかんじている。ありがとう。大感謝!

## 付録

### 歌謡詩劇「ロククンロール神話考Ⅱ 2024 末法篇」

鎌田東二



原作・脚本・鎌田東二（本作は、1970年に作上演した「ロックンロール神話考」を改作したものである）  
演出・芸術監督・レオニード・アニシモフ  
制作・主演・劇団ノーヴェイ

上演：2024年12月（を期待しているが、無理なようだ）

## 出演者

### おのごろ村の住民3人

- ① 良夫（よしお）
- ② 悪売（あくめ・女性）
- ③ 流太（りゅうた）

狂言廻しⅡ天気予報官：天気見太郎（てんき・みたらう）

イザナギ

イザナミ

## 少年少女探偵団員

- ① ルリア（少女）
- ② ジョバンニ（少年）
- ③ 都留女（とどめ、少女）
- ④ 鯉太郎（こいたろう、少年）
- ⑤ Ocar・クイア（性同一性障害の少年・少女？ 異星人？ 宇宙人？）

## 異星人

- ① ニーチェ
- ② 空海
- ③ おつる（阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」）
- ④ マッチ売りの少女こと実はモッキリ屋の少女コバヤシチヨジ
- ⑤ 番場の忠太郎
- ⑥ デロリンマン
- ⑦ 宮沢賢治

## 序幕

日本列島のどこかにある「おのころ村」

**悪売** 「商売、あがったりだよ。こんな、お天気じゃよう。作物も、売る物も、盗る物もなんにもねえ。干上がっちゃったよ、もう。どうなってんだ、この世はよう。もうお手上げかい？」

**良夫** 「アクメよ、そんなときだからこそ、おらたち、いっしょけんめい、おてんとさんのしたで、がんばるんだよ。笑う門には福来たるだよ。わはははは。わはははは。ワー、ハッ、ハッ、ハッ！ がんばるべ〜！」

**流太** 「とはいえのう、ヨシオよ。おらたち、もうなにをしてもダメなんじゃねえのか？ なにをしても、なにもできねえよ。アクメが言う通り、おれたち、干上がっちゃったのさ。」

むかしむかしあるところに、不思議な樹と巖（いわ）と泉があつて、それぞれ、実に立派な威厳をもつて、互い自慢をしてんだって、さ。

俺は、世界一高い樹だぞ、僕は世界一大きな堅い巖だよ、わらわは世界一きれいでおいしい水の湧く泉よ、と、ね。

だがそれも、いつしか、樹は斬られて家や机や椅子になり、巖は割られているんな道具にされてしまい、泉は汲み尽くされて、もう水一滴も残されていない、だと。

そんな世の中になってよう。この世は「末世だ、末法だ！」と叫ぶ荒法師たちが跳梁跋扈するようになってさ。もうみんな、世も末じゃ、親が子を殺し、子が親を殺し、あらゆるものが殺しあう、手のつけられねえ世の中になっちゃったのさ。」

**悪売** 「リュウタの言う通りさ。もう、どうにも、こうにも、手がつけられないのさ。」

**良夫・悪売・流太** 「かみさま、ほとけさま、ごせんどさま、まんまんちゃん、なんとかしてくだせ〜！！おねがいます。おねがいしますっす！」（と叫ぶ）

——そこへ、狂言廻しの流浪人の天気予報官・天気見太郎がやってくる。

天気予報官・天気見太郎「ぼくは由緒正しき天気予報官です。国際天気庁の事務次官まで務めた大変優秀な天気予報官であり、天気情報収集官でありました。

でも、去年、コロナ制約が解除され、それとともに突然、われらの仕事も解除解約されてしまったのです。

もう、この先、天気予報の仕事がない、と判断されたのです。なにしろ、天気がないのですから。嗚呼、かなちいなあ。

かくして、国際天気庁は解体。各国天気予報官は、みんな、てんでバラバラ。各地に散っていきました。そこで、どうしているか、もはや消息不明でござります。」

### 「悲の岬」(を朗詠)

月光は黄泉路を越えてきた。満月を串刺しにしたまま血を舐めている処刑台の山猫は何に向かって吠えているのか。月夜に還ってゆく何処の島がある？ 故郷への道は塞がれたまま魂の難民は国境線で不安と恐怖の夜に怯える。全世界を覆う電脳もこの怖れの暗渠をほぐすことはできない。絶対零度の深海闇夜。癒しなどどこにもないのだ。救いがあるとすれば無力に震える独りの夜を無為に過ごすのを見届ける自己があることのみ。深遠を呼び覚ますモノが存在するとしたら黄泉路を越えて自己を突き通す無限遠点のまなざしと意思を植えたこと。超越の波動が悲の受精卵を苦の岬から突き落とす。満月に向かって悲しく聳え立つ母之理主(モノリス)よ、応答せよ、応答せよ、応答せよ！

「探すために生きてきた」（狂言廻しの天気予報官を中心におのごろ島村人々とともに歌う）

へ 探すために生きてきた 道を求めて生きてきた

夢を求めて生きてきた 愛を求めて生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 切りがない

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 とめどない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 道がない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた

時を求めて生きてきた 闇を潜って生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 切りがない

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 とめどない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 終わらない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた

路を求めて生きてきた 夢を求めて生きてきた

1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 果てしない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 ときがない  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 あてがない 1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 0 みちがない

探すために生きてきた 探し求めて生きてきた  
夢を求めて生きてきた 道を潜って生きてきた  
愛を求めて生きてきた・・・

**天気予報官**「今日は朝から曇りのち晴れ。山間部ではときどき小雨も降るでしょう。時には、カミナリも鳴り響くでしょう・・・(と言っている間に、感極まったのか、しくしくと泣き始める)・・・みなさん、もう、そんな牧歌的な天気予報はできなくなってしまいました。みなさん、天気は死にました。みなさん、天気は死んだのです。わたしたちが、わたしたちが、殺してしまったのです。」

「みなさん、**天気は死にました**」(天気予報官が朗詠)

「みなさん 天気は死にました」

と 高校三年生の田村君は 言った

その田村君は 生きていますか？

五十年も昔のこと

荒れ狂う天地万物

林檎よ

縁は異なるもの味なもの

そのとおりだが  
でもね

死んだ天気も 縁次第

そのように なって そのように ある  
あるべくして ある なるべくして なる  
世界はそのようにうごいている 縁はそのようにはたらいっている  
1ミリ1センチたりとて恣意的ではない  
成るべくして成る 在るべくして在る

ありをりはべりいまそかり 青森カルシウムはどこ行った？

白田甚五郎は飛びのいた 大森から青森まで

その飛躍こそが猿樂芸能 天狗舞 マイトレーヤ

そは如是我聞 聴くべき耳を研いた 研磨研耳

いかつこなく いかしまぐはひのごと

弘前に 花折れて立つ

やつかみみ はしぬれど ねもないど

落穂拾いの姉御を拾った 恐山にて

津軽三味線の 音律たかあま ぐひのみこと

だがされど されど木島 みやこじま

いつまで封せど ねこばばの

影落ち延びて 地に臥せり

やつがれは しとどぬれて

大河の一滴まで のみほした

ぬれおちど ぶちそいど れおなるど はれおから ひとしづく

はれほれ みれをれ

行き場なし 溜り場なし 咲き場なし 馬場愛なし



そうだとしても

すべてをいれて すべてをすてて

本日早々

みなさん 天気は 死にました

みなさん 天気は 死にました

みなさん、天気は、死にましたー！ー！ー！（全員で）

## 第一幕 イザナミ・イザナギの子探し

子どもがどこに行ったのか？ 何をしているのか？  
わからない。子どもの行方を捜す。

天気見太郎「(最初だけ、祝詞調で)掛まくも畏きイザナギ・イザナミの大神たち。あなたたちはいづこにいますや。この死に給うお天気様をどう見そなわしますや。日の本の生みの親たるイザナギ・イザナミの大神たち。あなた様のお声が聴きとうございます。」

イザナミ「(横目で、奇妙な姿の天気見太郎をチラと見ながら、目の前にいるかつての夫に向かって)イザナギよ、久しぶりじゃ。相変わらざる(あなにやし、えをとこ!)じゃのう。いい男じゃ。しかし、おぬしとふたたび会うのは、萬代(よろづよ)を経てのことじゃ。

気の遠くなるようなむかしむかし、われらも夫婦(めおと)じゃった。けなげで、いとおしい、日の本最初(はじめ)の夫婦(めおと)じゃった。われがはじめにおぬしに声をかけたがために(ひるこ・あはしま)ができて、子の数に入れずとなってしまうが、その(ひるこ)も(あはしま)もだいたいな大事なわれらの子じゃった。そのことを、しっかりと、天つ神々に伝えることができないほど、われも幼くもの知らずであった。

今となつては、そのことは、間違いであったとは思つてはおらぬ。間違いでもなんでもなく、むすひの自然(じねん)のままのことじゃった。だから、そのまま受け入れればよかつたのじゃ。われも未熟じゃったのう。だが、おぬしもじゃ。イザナギよ!」

イザナギ「イザナミよ、まことに久しぶりじゃ。元氣そうで何よりじゃ。昔のことを変えることはできぬが、われも幼なかつた。おまえの死を受け入れられなかつたのじゃ。許してくれ。おまえは今も(あなにやし、えをとめ)じゃ。くあなにやし、え、をとめぞ。そのことをずつと詫びとともにおまえに言いたかつたのじゃが、手立てがなかつた。すまぬ。すまなかつた。われの未熟ゆえ、おまえにおおきな(辱(はぢ))と悲しみと怒りを与

えてしまった。われの愚かさであり、未熟さであり、至らなさであった。ここからおわびする。今となっては、遅いかもしれぬが・・・」

イザナミ「そうじゃ。遅すぎたぞ、イザナギよ。時が経ちすぎたぞ。その間に、われらの生みし子どもたちがどうなっているのか、見えぬままじゃ。イザナギよ、罪滅ぼしに、われとともに、われらの子どもや孫や子孫が、どのようになっているか、どこで、何をしているのか、見に行こうぞ！」

イザナギ「おう！ よろこんで、お供するぞ。(あなにやし、え、をとめ)よ！ イザナミよ！」

イザナミ「イザナギよ、われらは新婚旅行なんぞ、とてもじゃないが、できる時代じゃなかったのう。神代(かむよ)の昔じゃもん。ともに、天の浮橋に立って、天つ神から授けられたアメノヌボコを塩コロコロに掻き混ぜて、おのずから成ったおのごろ島。そのおのごろ島に降り立って、みとのまぐはひをして、むすばれて、われが島々を出産し、続いて神々を出産し、こうして、次々と自然万物を産み出したのじゃ。そして、火の神カグツチを産んで、ミホトを焼いて黄泉の国に身罷る時も、反吐から金山彦・金山姫などの金属神を、ウンチから埴安彦・埴安姫などの粘土神を、おしっこからミヅハノメなどの水神を産み出したのじゃ。思えば、次から次へ、よう出産したものじゃ。吾ながらようやったと、褒めてやりたいわ。」

イザナギ「おう！ ようやったぞ。おまえは。この青人草のニンゲンたちも、元はと言えば、おまえが生み成したもので。すごいぞ、イザナミ。ようやった。ようやった。イザナミよ、大妣(おほはは)よ。」

イザナミ「今さら、そう言われてものう。うしくないこともないが、片腹痛いのう。それは、その生み成したわが子の末裔がどうなっているか、わからないからじゃ。」

イザナギ「この日の本は、どうやら、縄文時代から、弥生時代、古墳時代、律令時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、戦国時代、江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代、平成時代、そして、令和時代の本年、

令和六年となりにけり。よろず年が経つてしもうた。そんな時代のみぎひだり、来し方行く末がどうなっているであろうのう。」

イザナミ「いやいやいやいや、見るまいか、見るまいか。疾く疾く早う見てみるとするか、イザナギよ。吾らが子孫の行く末を！」

こうして、この世巡り、冥界・異界めぐりに出かけてゆくイザナミとイザナギ。

## 第二幕 少年少女探偵団の親探し

天気見太郎「こうして、日の本元（はじめ）のちちははであるイザナギ・イザナミの大神様たちは、時空を超えて現代の少年少女のもとにまっしぐら。」

（イザナギ・イザナミはこの世と黄泉の境の黄泉つ平坂まで来て、かつてイザナギが道を塞いだ千引の大石のところまできて、少年少女たちの会話を覗き見る。少年少女がやさぐれた理由については各演技者が自由に物語る。）

ルリア「暗い。暗い。暗い。物がよく見えない。みんな、だいじょうぶか？ 近くに集まってくれ。ぼくたちのこの世界は、もう、終わりかもしれない。あたしは、女として産まれたという。もちろん、このあたしを産んだ母もいる。父もいる。北千束のハインソな家だな。」

でも、ぼくは、そんなちちははが、どうしても、どうしてもほんとうの、ほんとうのははちちとは思えなかった。そして、ほんとうの、ほんとうのははちちがどこかにいると、思いつづけてきた。この暗い世の中で生きていくために、ぼくたちは、ほんとうの、ほんとうのははちちを捜しに行こう！

ジヨバンニ「おとうさんはラッコの上着を持って帰ってこなかったし、おかあさんは死んじゃったけど、ぼくはカパンネルラの星を探しに、もう一回、銀河鉄道に乗るつもりだよ、瑠璃亜（ルリア）。ほんとうのほんとうの、まことのことのしあわせと父母を探して。瑠璃亜も都留女も鯉太郎も、一緒に往こう！」

（ルリアとジヨバンニが中心となって歌う）

### 「銀河鉄道の夜」

この地球から見ると 銀河は白い乳の流れに見えて 夜空を彩る

その夜 ケンタウルスの祭りで ぼくは 不思議な夢を見た  
銀河の夜汽車に乗って 星の世界を旅する夢 だった

あの空の果てまで ぼくたち二人で  
まことのさいわいを 探しに行こう

カンパネルラの星まで ぼくは旅をする  
カンパネルラの星から ぼくは飛んでゆく

この宇宙の中で 地球はいのちと苦悩に満ちた星として輝く  
その夜 銀河の渦の中でぼくは孤独な星となる  
いっしょに行こうと誓ったきみはどこにいるのか教えて 教えて

あの空の果てまで ぼくたち二人で  
まことのさいわいを探しにゆこう

カンパネルラの星までぼくは旅をする  
カンパネルラの星から独りで飛んでゆく

あの空の果てまで ぼくたちみんなで

まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう 探しにゆこう

都留女（とどめ、少女）「いい歌だね、ジヨバンニ！ 君らしいや。でもね、〈まことのさいわい〉なんて、幻想だよ。そんな夢を追いかけてもむなしく崩れるだけ。それは、ニンゲンの歴史が物語ってるだろ？ ぼくたちは、救い難く、度し難い生命種なんだよ。それにさあ、まあ、実の父母にもこんなものか、と思うし、幻想を持たないよ。本当のほんとうの父母なんていないよ。それ、なに？ って、思わないのかなあ。いい加減、目を覚ましなよ。ぼくたちの現在と未来は、汚穢と絶滅にまみれてるのさ。」

鯉太郎「つたく、救い難く、度し難いのは、都留女、おまえじゃないか。おまえも昔は夢見る少女だったのに。いつからそんな、すれっからしになったのだい？ どこにも、夢も希望もないこの世の中がおまえをそんなふうに変えてしまったのかなあ。」

都留女「何、いつまでも、甘いことばっか、言ってるんだよ。だから、鯉太郎は現実を見ない夢見る男、ドリマーの恋多郎と言われるのさ。20歳にもなって、いい加減、目を覚ましなよ。もう、夢見る未来なんて、ありやしねえよ。ただただ、崩れてゆくだけ、滅びてゆくだけ、死んでゆくだけだよ。だつたらさあ、つかのま、今だけでも面白いこととして死んでいこうよ。ほんとうの、ほんとうの父母なんて、無駄な探訪はきっぱり止めてさ。」

鯉太郎「都留女、絶滅していくから、その覚悟があるから、最後まで夢見るといふ生き方だってあるんだぜ。」

ジヨバンニ「そうだよ。都留女、瑠璃亜、ぼくたちは、やっぱり、最後の最期に、ぼくたちの夢と希望を遺そうよ。未来に。」

Over（異星人・宇宙人意識を持つ性同一性障害の少年・少女）「つたく、ンゲンて、ほんと、やっかいで面倒くさ

くて奇妙な生き物だな。絶望するし、希望するし、夢見るし。忙しいったら、ありやしない。ぼくは、未来の波留星からやってきた宇宙人だけど、みんなの探検には手を貸すよ。ほかにすることもないしね。でも、これだけは最初に言っておくよ。

ぼくたちは、どこにも行けるし、何でもできるんだよ。ほんとうは。何もできないとか、どこにも行けないと思っているのは、自分の意識だけ、心だけなんだよ。ほんとうは、どらえもんを持っているどこでもドアのように、どこでも行けるんだ。さあ、つべこべ言わずに早く出発しよう！」

ジヨバンニ「クイア、ありがとう。みんな、一緒に行こう！ 手を組んで、円陣を作って。さあ、出発だ。Go！」  
全員で「Go！ 合！ 業！」

「墮天使ロック」 作詞・作曲 つげ春乱（早川義夫）

へ見つめる前に跳んでみようじゃないか

俺たちにできないこともできるさ

さあみんなでロカビリーを踊ろう

心は変わりやすいけれど

本当はなにかわっちゃないのさ

まわりだけがぐるぐるまわるのさ



子供の頃は良かったじゃないか  
裸でも生きていられたぜ  
さあみんなでツイストを踊ろう

ないものねだりだけでも

俺たちの地平線まで

さあみんなでゆこうぜ出発だ

ころがってゆけくずれてゆけ

堕ちるところまで墜ちてゆけ

咲いた花がひとつになればよい

見つめる前に跳んでみようじゃないか

俺たちにできないこともできるさ

さあみんなでブルースを踊ろう

**第三幕 異界遍歴** イザナミ・イザナギと少年少女探偵団がともに訪なう

天気見太郎「こうして、現代の少年少女たちは、ほんとうの、ほんとうのちちははを探す旅に出たのでした。そ

して、神代（かみよ）のイザナギ・イザナミの大神様たちも、現代の子どもたちを見届ける時空遍歴の旅に出たのでございました。そして、その結果は如何に？ 如何に？ 如何なるや？」

### ① ニーチェ

ニーチェ「ツアラトウストラよ、今日も朝日に目覚めた。わが大きな理性たる身体は明晰に目覚めておるぞ。ツアラトウストラよ。今朝はしかし、奇妙な風が、東からも、西からも吹いてくる。」

かつて、地球の橋の極東の日本では、東からの風を東風（こち）と呼んだそうだが、「東風（こち）吹かば匂ひおこせよ梅の花 あるじなしとて春を忘るな」と大宰府に左遷されて悲嘆にくれた大宰府権帥（だざいふごんのそち）の菅原道真是歌を詠んだと云う。

風流じゃのう、日本人は。だが、「超人」を説いた吾は違うぞ。ツアラトウストラよ。そんなルサンチマンとセシメンタルな哀憐に満ちた歌なんぞではなく、もっと明晰な大きな理性の遊戯を見せてくれようぞ。」

（とそこへ、東風に乗って突然少年少女探偵団の面々が現れ、少年少女たちが口々に）  
少年少女たち「ここはどこだ？ ここは、どこだ？ ココハ、ドコダ？」（と、探り合う）

ニーチェ「くらやみのなかの迷妄の中にいるようじゃな、異国の少年少女たちよ。」

ここは、そうじゃな、さしずめ、地獄の一丁目、吾（われ）が君たちの年齢のころに研究したギリシヤの神話世界ではハーデイスと言った冥界じゃ。吾はその住民となつて、訪れてきた者に、いつ果てるともなく、超人と永劫回帰と大きな理性である身体の哲学を辻説法しているのじゃ。

身体は大きな理性だ。一つの意味を持った複雑である。戦争であり平和である。蓄群であり牧舎である。とな。」

ルリア「どうしてぼくたち、こんなところに来てしまったんだろう。リッパな髭を生やしてもっともらしい理屈を言うおじさんさあ、おじさんはだれなの？」

ニーチェ「東の国からやってきた異邦人の若者よ、吾こそは後世に、二十世紀の予言者と讃えられたフリードリッヒ・ニーチェである。」

都留女「不倫どぎつい日輪？ ナンダ、そりゃ？」

ニーチェ「若者たちよ、よく聴け。吾は宇宙の声を聴いた。宇宙は超人を求めている。そして、時間は直線に流れておらん。永劫回帰するのじゃ。永劫の大車輪を廻すのだ。恐れるな。ルサンチマンも、コンプレックスも、ない。子どものように無垢なのじゃ。ありのままに、子どものように踊れ、若者よ！」

ルリアと都留女「言われなくても毎日踊り狂ってるよ！」

ニーチェ「おお、それでいいんじゃない。頼もしいのう。」

ジヨバンニ「ニーチェ先生、それでは、ぼくたちの、ほんとうの、ほんとうのちちははは、どこにいますか？」

ニーチェ「カーツツ！ 喝ツ！ たわけめ！ 父母未生以前の面目を知れ！ このやつこめ！ 海は荒れている。一切は海の中にある。さらばじゃ、行くがいい！ 吾が息子と娘と異人たちよ！」

## ② 空海

鯉太郎「ああ、おどろいた。何だったんだ、あれは。おれたち、どこに迷い込んだんだろ？」

クイア「地獄の一丁目。ハーデイスのアゴラ、冥界広場だよ。みんな、ここがどこにつながっているかわからないけど、この宇宙は多元多様で、穴ぼこだらけ。季節風次第でどこにでも時空誘導されるので気をつけよう。」

空海（僧形の初老の姿で上手から登場）「おお。かつての仮名乞児のように道を求める若者たちよ。こちらに來たれ。わたしは日の本に密教をもたらした空海という僧侶だ。」

ジヨバンニ「えっ、あの、あの、あなたが、あの有名な弘法大師空海僧都様ですか？」

空海「そうじゃ。わたしが空海じゃ。」

ジヨバンニ「恐れながら、わが師日蓮大聖人も一目置いて灌頂を受けた真言密法の伝道師空海僧都にお訪ね申し上げます。ぼくたちは、ほんとうの、ほんとうのちちははを探している者です。どうか、ご教示ください。かの『三教指帰』や『秘蔵宝鍵』を解き明かした明晰にして神秘不可思議なその知能をもって。」

空海「今どき珍しい礼を心得ておる若者じゃな。それ仏法は遙かにあらず、心中にしてすなわち深し。父母の恩も海より深し、山より高し、じゃが、ほんとうの、ほんとうのちちはとは、胎藏界の曼荼羅と、金剛界の曼荼羅の主たるマハー・ヴァイロチャナ、大毘盧遮那仏、すなわち、すべての根源、大元である大日如来のことじゃ。これこそ、真の父母なり！ よくぞ、問うたな。若者たちよ。」

ジヨバンニ「では、その大日如来の父母は何者でしょう？」

空海「う、うちゅう、宇宙そのものじゃ。」

ジヨバンニ「その宇宙の生みの親を知りたいのです。弘法大師空海様、どうかその真の父母をお教えください。」

空海「不生不滅、不増不減、色即是空、空即是色・・・悠々たり、悠々たり、はなはだ悠々たり・・・生まれ産まれ生まれ生まれて生（しょう）の始めに暗く、死に死に死んで死の終わりに冥し・・・重々帝網、すべてはつながっておる・・・ゆえに、三密加持して、即身成仏じゃ。ふしようふめつ・・・」（ぶつぶつ言いながら下

手に去ってゆく)

③ 番場の忠太郎

都留女「何言ってるんだろ? ぼくたちをけむに巻いてさあ。ちんぷんかんぷん。ちちんぷいぷいだよ。」

ルリア「すべては、ざれごと。言語明瞭意味不明だよ。」

ジヨバンニ「ぼくは、先生に言われたんだ。ほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまがおわすって。弘法大師空海様は、ほんとうの、ほんとうのちちははって、そのほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまだよって、言いたかったんじゃないかなあ。」

鯉太郎「ジヨバンニ、おまえはほんと、物分かりがよすぎるよ。そんなに、物分かりして、どうするんだよ。おれたち、わからないから、たずねあるいているんじゃないか。そんな、中途半端にわかってもらっちゃ困るな。こんなにやく問答なんかに納得してちゃ、だめだよ。」

ジヨバンニ(すなおに)「ごめん、鯉太郎。ぼく、きまじめなんだ。そんな灘の木一本のような自分を変えたいんだ。」

番場の忠太郎(突然登場)「ごめんなすって。ごめんなすって。ごめんなすって。赤城の山も今宵限り。赤城の山も今夜限り。生れ故郷の国定村や、縄張りを捨て、国を捨て、可愛い子分の手めえたちとも、別れ別れになる首途(かどで)だ。・・・あれっ、こりゃ、国定の忠治親分の名セリフだっぺ。ごめんチャイ!」

都留女「今度は、心機一転、起承転結、凄い転換だな。くだけすぎだよ、こりゃ。」

鯉太郎「あなたさまは、何者ですか?」

番場の忠太郎「えっ、ああ、おれっ？ おれのこと？ おれはさあ、正真正銘、生国不明、父母不明の永遠の旅がらす、番場の忠太郎ってあゝ、おれさまのことだわいなあゝ。」

鯉太郎「聞いたことねえな。番場の忠太郎、なんて。」

ジヨバンニ「ぼく、知ってるよ。たしか、長谷川伸原作で、大ヒットした『瞼の母』の主人公だよ。」

番場の忠太郎「（できるだけ滑稽に）ピンポーン！ そのとおくり！ そうです、わたしやゝ、その番場の忠太郎でござんす。瞼の母を探し求めて、諸国一軒の僧のように、孤独なマラソンランナーのアスリートのように、ストイックに母を探し求める旅を続けている一匹の旅鳥にござんす。よくぞ、聞いてくださりました。」

鯉太郎「ジヨバンニ、おまえはほんと、何でもよく知ってるな。すげえよ。」

ジヨバンニ「番場の忠太郎親分、どうか教えてください。あなたが探し求めている瞼の母は、ほんとうの、ほんとうの母なのでしょうか？」

番場の忠太郎「よくぞ、聞いてくれたわいのう。問題はそこ、それなのさ。ザット・イズ・ザ・クエスチョン。」  
ジヨバンニ「番場の忠太郎様、その答えは？」

番場の忠太郎「そうさな。そうだよ。そうなんだよ（自分ひとりだけ納得しつつ）。おりやゝ、ほんとうの、ほんとうのおつかさんを探し求めて、何千里。回国行者の旅を続けたさ。そしてどこに行っても、これがまことのおつかさんにちがいねえ、と思って、今度はかりはと思って「おつかさゝん！」と呼んでも、呼んでも、ごんでも、あつ、もとい、ふりかえってくりやしねえ。ほんとうの、ほんとうのおつかさんなんて、いやしねえのさ。おまえさん。ジンセイ、棒に振るなよ。おれのように。むだなおつかさん探しの旅なんぞ、やめちめえ。ほんとうの、ほんとうのおつかさんなんて、どこにもいやしねえ。両の瞼を閉じれば、ほんとうの、ほんとうのなつかしいおつかさんの面影が浮かんでくるのさ。それだけは、否定できねえよ。うん、否定できない。いくら、自己肯定感

のうすいおれでも。」

番場の忠太郎「泥の鳥ブルース」（を絶唱する）

「泥の鳥ブルース」

へ身を切るような鋭さを自分に向ける

身を断つような悲しさに我を失う

俺にかまうな 捨て置け あめつちよ

遠さにあこがれる自分にあきれる

近くにいる君を傷つける自分を恥じる

俺は荒ぶる泥の神 ちちははよ

生れてきてから愛されたことがない

死のうとしても死ねない自分を哄う

俺は飛べない泥の鳥 しらとりよ

恋をしても飛べない自分を呪う

怒りの火山に身をゆだねて死にたい  
俺は廃墟のガラクタダ 富士やまよ

生れてきてから自分を壊したことがない  
一度たりと自分を超えたことがない

俺は飛びたい泥の鳥 始祖鳥よ

生れてきてから自分を壊したことがない  
生れてきてから愛されたことがない

A h u A h u

鯉太郎と全員「ありがとうございます。番場の忠太郎さん。あなたの答えが、一番、心に響きました。よくわかりましたが、もう一回だけ、セカンドオピニオンを求めたいと思います。」(と言って、少年少女探偵団は去っていく)。

(一人取り残されて)番場の忠太郎「赤城の山も今夜限り・・・さみしいなあ。つらいなあ。ぼっちのおれは・・・  
国定の忠治親分、このどうしよもない、やさぐれのおれをひろってください！ チャイ！ ちゃいちゃい、ありや、ちやいなちやいな。」(と、踊りながら、上手に消える)



④ おつる（阿波人形浄瑠璃「傾城阿波鳴門」）

ジヨバンニ「ぼくたちの旅は、無駄なのか、徒労なのか？」

ルリア「あきらめるのか、ジヨバンニ。ぼくはまだあきらめねえ。」

おつる（そこに鈴をチリンチリンと鳴らし、「子を産めるその父母の恩山寺 訪ひがたきことはあらしな」と四国遍路第十八番札所恩山寺のご詠歌を詠いながら登場）「あ〜れ〜、〜ととさんの名は阿波の十郎兵衛（じゅうろべえ）、かかさんの名はお弓と申します。」

ルリア「子どもじゃないか。おまえはだれ？ 何者？」

おつる「わらわは、阿波のおつるともうします。ととさんとかかさんを探しに、摂津の国の大阪にいと聞いて、阿波の国から海を渡って、巡礼姿でととさんとかかさんを探しに来たのでございます。わらわと同じ年の子どもはみな、家において、ととさんとかかさんと一緒にしあわせに暮らしています。でも、わらわにはそんな（キリリとして）スイートホームもハッピーファミリーも、ナツシングエルス、なんにもないのでござります。わらわはまだ年端もゆかぬ子どもでござります。ととさんとかかさんを探しているのでござります。」

ルリアと都留女（がらにもなくやさしげに）「見つかるといいね。」

おつる「おなさけ、ありがとうございます。（しおらしく）わらわは旅をつづけけます。」

ルリアと都留女「おう。道中、気をつけるんだよ。」

（おつる、「南無文殊三世の仏の母ときく 我も子なれば乳こそほしけれ」と第三十一番札所竹林寺のご詠歌を詠いながらしずしずと上手に去ってゆく）

ジヨバンニ「ああ、悲しい話だなあ。おつるは、有名な阿波の人形浄瑠璃で、近松半二原作「傾城（けいせい）」

阿波鳴門」第八番巡礼歌の主人公なんだよ。巡礼者の姿で阿波を出て大阪に行ったんだけど、ほんとうのはには突き返されて、ほんとうのちちに殺されるという最悪の悲劇のヒロインなんだ。とても、つらい話で、江戸時代に大ヒットしたんだよ。」

全員「そうなんだ。」（とつくづく感心する）

都留女「そんな話を聞くと、なえちゃうなあ。ぼくたちのほんとうの、ほんとうのはちち探しの旅も空しくなっちゃう。」

（舞台奥の方で、ひそやかに）

イザナミ・イザナギ「子どもたちよ、悲観するでない。おまえたちは、何にもまちがつとらん。ほんとうの、ほんとうのはちちは、いるのじゃ。おまえたちのころのうちに。たましいのなかに。まぶたのおくに。」

イザナミ（突然歌いだす）「へ思い出してごらん。五つのころを。（中島みゆき「五才の頃」）そうじゃ。三つ子の魂百まで、ということわざも日の本には生まれてきたぞ。」

### ⑤ マッチ売りの少女、こと、実はもつきり屋の少女コバヤシチヨジ

（マッチ売りの少女、下手から登場）

マッチ売りの少女じつはもつきり屋の少女「寒い寒い大みそかの雪がしんしんと降り積もる夜、わたしは、とぼとぼと寒風の中を歩いているうちに、馬車にはねられそうになって、大切な木靴を失くしてしまいました。足は

凍るように冷たく、おなかもすいて、ひもじい、さびしい思いに泣きそうになっていました。

どの家の窓にも明かりがあかあかとおついでいて、おなかグウとなりそうながチヨウの丸焼きのにおいがします。そっかあ、今日は大みそかなんだ。でも、わたしには、帰る家はありません。わたしはみなし児、家なき児。寒さをしのいで、売れ残ったマツチを擦って少しでも両手やからだをあたためているうちに、そのマツチもなくなってしまう、とうとう死んでしまったのでした。」

全員「知ってる！ マツチ売りの少女だ！」

マツチ売りの少女じつはもつきり屋の少女「そう！ わたしはマツチ売りの少女。でも、もつきり屋の少女でもあるの。」

ジヨバンニ（だけが）「知ってる！ つげ義春の名作漫画「もつきり屋の少女」の主人公コバヤシチヨジだ。」

コバヤシチヨジ「そう。おら、コバヤシチヨジ。むげいのおどつつあは、きぐしねくてやんだ、おら。」（向かいの家のお父さんはものの道理が分からなくて私はいやだ）おらは、みじめ、です。せつない、です。コバヤシチヨジは赤い靴が欲しいです。でも、それを買うにはお金が要ります。そのために、おら、乳首をさわらせるのさ。みんな、頑張れちよじ、頑張れちよじ、チヨジ、と応援してくれるっけど、いつも五分も我慢することができず、お金をもらえないのつす。おら、みじめです。せつないつす。死にたいつす。」

ジヨバンニ「チヨジ、ぼくはがんばれ、とは言わないよ。言えないよ。チヨジ、そこから逃げよう。ぼくたちといっしょに、ほんとうの、ほんとうのはちちを探しに行こう！」

コバヤシチヨジ「おら、みじめつす。せつないつす。しにたいつす。でも、おら、おめえについていくつす。」  
少年少女探偵団全員「いっしょに行こう！」

(コバヤシチヨジを含む少年少女探偵団全員が「銀河鉄道の夜」の最後のフレーズを一緒に歌う)

「あの空の果てまで ぼくたちみんなで

まことのさいわいを探しにゆこう 探しにゆこう 探しにゆこう

## ⑥ デロリンマン

デロリンマン「みんな、聞いてくれ。この冥界の十字路、ハーデイスの広場で。おれは、デロリンマン。むかし、三四郎と名乗っていた。だが、自殺未遂をしたために、こんな顔になっちゃって。

だからこそ、おれはデロリンマンとなって、人間を救うのだ。ポロボロのマントをひるがえし、赤フン一丁で街を歩いて、おれは神だ、魂のふるさとだ、と言って回ったが、妻のママ子にも、息子の四郎にさえも、邪険にされて追い返されて、嘲笑われた。

けれども、おれはへこたれない。くじけない。めげない。何度踏みにじられても、踏みにじられても、また立ち上がるのだ。そして、愛と正義の世の中をつくるのだ。オロカメンや紅トカゲにバカにされ、攻撃されても、何度も何度も殺されそうになっても、おれは立ち上がる。おれはよみがえる。おれはめげない。おれはくじけない。おれはデロリンフンドシ族」

(ギンギンのエレキが鳴り響き、赤フン一丁でデアロリンマンが「フンドシ族ロック」を絶叫する)

「ふんどし族ロック」

へおまえのフンドシ 赤フンか 空を飛んでゆけ  
おれのフンドシ 青フンよ 海を越えてゆけ  
いつまでたっても おれたちは フンフンフン族 フンドシ族

おまえのフンドシ 金フンか ビルを抜けてゆけ  
おれのフンドシ 白フンよ 巷を泳いでゆけ  
自由を愛する おれたちは フンフンフン族 フンドシ族

気が気でねえよ おれたちは  
ジリ貧民族 少数民族 マイノリテイ フンフンフン族 フンドシ族

言わずと知れた おれたちは フンフンフンドシ族  
言挙げしないが おれたちは フンフンフンドシ族  
この世の悪に 立ち向かう フンフンフン族 フンドシ族

おれたちゃ 敵に立ち向かう パンツ・グローバリゼーション

世界にや 多様性が必要よ アンチ・ファンダメンタリズム

自由を愛する おれたちは フンフンフン族 フンドシ族

誇りを持つとうぜ おれたちは

尻貧民族 少数民族 マイノリティ

フンフンフン族 フンドシ族

あ フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフン族 フンフンフンドシ族

## ⑦ 宮沢賢治

「フンドシ族ロック」の余韻に浸り、首をフリフリしながら登場してくる宮沢賢治。

宮沢賢治「そう。フンドスの君よ。わだぐすはへこたれそうになって、立ち上がるために、『春と修羅』と『注文の多い料理店』を書き上げて自費出版したのす。千部も、だなす。だども、十冊も売れなかつたな、のす。稗貫農学校の生徒たちも、ちんぷんかんぷんと言つてた、のす。そこで、わだぐすは「虔十公園林」をつくつたのす。」

ジヨバンニ「あつ、ケンジにいちゃん！ ぼくの生みの親。ぼくの、アバターお父さん、かな？ でも、ほんとうの、ほんとうのお父さんかもしれない。」

宮沢賢治「わだぐすめは、みんなに笑われ、石を投げつけられてもぐじけな、へこたれない、めげないデロリ

ンマンに、度十とデクノポーとおなじたましいを感じるのす。

からだはうそをつかない。

が、ここはうそをつく。

しかし、たましいはうそをつけない。

### 宮沢賢治と少年少女探偵団が交互に群読

「わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないでも、きれいにすきとおった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわっているのをたびたび見ました。

わたくしは、そういうきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。

ほんとうに、かしわばやし青い夕方を、ひとりて通りかかったり、十一月の山の風のなかに、ふるえながら

立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたないということを、わたくしはそのとおりに書いたままでです。

ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。

(途中からみんなで合唱) けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたり幾きれかが、おしまい、あなたのおつきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。(『注文の多い料理店』序)  
宮沢賢治「わだぐすはいのりです。ねがいます。ほんとうの、ほんとうのかみさま、ほとけさまに。いのりです。ねがいます。ささげます。」

ジヨバンニ「すきとおったほんとうのたべものって、ほんとうの、ほんとうのはとちちのことですね? ケン  
ジおっとう〜っ!」

## 宮沢賢治「農民芸術概論綱要」序

「おれたちはみな農民である ずるぶん忙がしく仕事もつらい



もつと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

われらの古い師父たちの中にはさういふ人も応々あった

近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じたい

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに依じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」

ジヨバンニ「われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」

全員で「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに依じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう 求道すでに道である」

全員で「君の名を呼べば」と「神ながらたまちはへませ」を絶唱する。

「君の名を呼べば」

へああ ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば  
君の名を呼べば 君の名を呼べば  
打たれて 雨（アーメン）

ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば  
君の名を呼べば 君の名を呼べば  
どしやぶり 雨（アーメン）

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

のうまくさまんだばーだらだんせんだんまかろしゃだそわたやうんたらたかかんまん  
おんあほきやべいろしゃのうまかほだだまにはんどまじんばらはらばりたやうん  
のうぼうあかしやきやらばやおんありきやまりぼりそわか

オンアマリタテイセイカラウン オンアマリタテイセイカラウン オンアマリタテイセイカラウン（3回）  
オンソラソバテイエイソワカ オンソラソバテイエイソワカ オンソラソバテイエイソワカ（3回）

南無神変大菩薩 南無神変大菩薩 (3回)

南無大師遍照金剛 南無大師遍照金剛 (3回)

南無日蓮上人南無日蓮上人南無日蓮上人南無日蓮上人 (3回)

オンマニペメフーム オンマニペメフーム オンマニペメフーム オンマニペメフーム (4回)

クリエ・エレイソン クリエ・エレイソン クリエ・エレイソン クリエ・エレイソン (4回)

アラール・アクバル アラール・アクバル アラール・アクバル アラール・アクバル (4回)

神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ 神ながらたまちはへませ (4回)

ギャーテイ ギャーテイ ハラギャーテイ ハラソウギャーテイ ボウジソワカ 般若心経

ああ ああ ああ ああ ああ

君の名を呼べば 君の名を呼べば

君の名を呼べば 君の名を呼べば

どしやぶり 愛(会い、合い)

「神ながらたまちはへませ」

へ神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

岩陰より滲み出して来る 水を探して 夢を探して

向こう岸に渡る 向こう岸に渡る

夢を開いて 夢よ開けと

あはれあはれ はへ あはれあはれ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

なけなしの夢が壊れて 行く当てもなく流離う

尽十方未来際 尽十方未来際

夢を開いて 夢よ開けと

天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

神ながらたまちはへませ神ながら 神ながらたまちはへませ神ながら

祈りの言葉は死に絶えても 朝日の中で甦り咲く

尽十方未来際 尽十方未来際

夢を開いて 夢よ開けと

天晴れ天晴れ はへ 天晴れ天晴れ はへ

神ながらたまちはへませ神ながら

宮沢賢治「尽十方未来際まで、銀河系を意識して、生き抜くのだった。わだぐすたちの最後の祈りと願いを結集して。求め続けるのつす。」

クイア「しゃーないなあ。みんな、生真面目すぎて。もつともつと奇妙な世界を持つてるのさ。この世界は。宇宙は。いづれ、まもなく、きつと、そんな奇妙な大変動と大変身がやってくるさ。そして、ぼくたちの夢に近づいていくさ。」

イザナミ（涙に掻き暮れながら）「イザナギよ、けなげじゃ。けなげじゃのう。青人草のニンゲンは。われらの子孫は、安泰じゃ。大丈夫じゃ。」

イザナギ「そうじゃのう。大丈夫のようじゃのう。」

(と、突然、雷鳴がとどろき、稲光が点滅し、大地震と大津波と火山の大噴火と山崩れが同時に起こり、壊滅的な破壊に見舞われ、すべてがなぎ倒され、絶滅する。あとには、ニンゲンも、草木一本も、いのちのひとかけらも、残っていない(ように見える)。)

## 終幕

(叫ぶように) 悪売「終わりじゃ、終わりじゃ、終わりじゃ。世の終わりじゃ。(嘆くように、つぶやく) 終わっ



からだの準備もできてます？  
たましいの準備はいかがです？

みなさん天気は死にました  
でも、死んだとはいえ天気はありまする

狂天働地の天気ではありまするが  
前人未到把握不能のお天気ですが

みなさん天気は死にました  
どうして天気は死んだのか？

だれもほんとうの答えはわかりません  
でもだれもがうすうすわかっています

みなさん天気は死にました  
曇りのち晴れとか晴れのち雨とか

天気予報官も上がったたり  
天気に振り回されることもなく



みなさん天気は死にました

むかしむかしそのむかし

秦の始皇帝の時代に天気予報官が現われて  
皇帝様に天の気を伝えました

よしよしおまえは愛い奴じゃ

天気の一つも飼ってみろ

俺の意思を天に伝えて天命としろ

そこから天気への脅迫が始まりました

みなさん天気は死にました

秦の始皇帝ばかりではありません

あらゆる時代のあらゆる為政者は

天気のところを気にはしながら天気を憎みました

思い通りにならないもの すぐろくの賽賀茂川の水僧兵

いや一番思い通りにならないものは 天気のところでございます

みなさん天気は死にました

天気のところをだれもがわからず

天気のところをだれもが通ぜず

天気はしだいにくるって孤独死してしまったのでありました

みなさん天気は死にました

誰にも何処にもまんべんに

いろいろな気配り天配り

配りすぎて疲れ果て

どうするすべもないままに

みなさん天気は死にました

みなさん天気は死にました

葬儀を行う人はいませんか？

どんな葬式必要ですか？

いのりいのりいのりです

みなさん天気は死にました

みなさん天気は死にました

ナポレオンもヒトラーも豊臣秀吉も侵略できなかったもの

それが天気だったのに

どうしたことか あろうことか

みなさん天気は死にました

悲しみに満ちた追悼メッセーじ

不安にあふれた警告メッセーじ

怖ろしいばかりの脅迫メッセーじ

そのどれもがどうすることもできない不可能性のトーン

みなさん天気は死にました

天気予報がなつかしい

ああ天気よ天気帰って来ておくれ

みなさん天気は死にました

曇りも晴れも雨も雪も台風もない

みなさん天気は死にました

ぼくらもともに死にましよう

ぼくらもすべなく死にましようか

みなさん天気は死にました

でも 死んでも終わりではありません

死んで花実が咲くものか と言いますが

死んで花実も咲きます

みなさん天気は死にました

でも 死んだあとは よみがえるだけ

あとは 野と成り 山と成る

みなさん天気は生まれます

みなさん天気は阿礼まする

みなさん天気は生まれませ

## 「悲の岬Ⅱ」（天気予報官が朗読する）

深い夜の瞳の底でアンテナは疼いた。音信絶対不能の音源を逆探知したが事切れてしまった悲劇的な預言者を弔う。耳孔の奥でトマトが潰れマグネシウムの閃光が散らばった。神父は手旗信号を使って必死の面持ちで十字を

切ったが誰も気にせず通り過ぎた。夜空を染める無関心と迸る涙のような流星。帰って来い。暗号解読が遅れたため避雷針が裂けて粉々に砕けた。もう一步も先に進めない。三步退いて倒立したまま巫女は緋袴を翻して昏睡した。懐かしさこそ誘惑の手口なのに。忘れるな。未来を覗く窓が指揮棒で激しく割られていた。空に向かつて牛乳を撒き散らした。ハレルヤを叫びながら白色驟雨に撃たれ南十字星に内臓を鷲掴みされたまま遠くの遠くまで嘆きの河を渡って往く。その日始祖鳥は翔ぶ空を切なく探した。

## 「メコン」

メコン

棚の上の骨壺を抱いて 夕焼けの散華の海に入る  
人知れず葬りの蛾 矢板の上に意気消沈した雪だるまが 悶えた

この世の果てまで飛んで来たよ 誰にも見られず 何人にも咎められず  
靴下を履いたまま飛び込んだ おまえの胸に  
メコンよ

防ぎようもない空と 喘ぎ見るばかりの おまえの喉元

ぬめりと流れてゆく舌尖を 衝立は途絶えた

メコンよ

何というなつかしさの奥に

蜜蜂がつつき合つて 互いを刺し殺す現場を

生まれたばかりの 二日月の生卵 割れぬまま呑み込んだ おまえの度量  
いくばかり いかばかりかと 捨て石に訊く 死後の生存を

名ばかりの孤独に 唯名論者は躓く

明日を信じなくせに 明日を待ち望む偽善者よ

サンクトペテルブルグまで 日傘をさして

揺籃の扉 消え果てし秀妻 海鮮問屋の蛸と消ゆ うつばりの夜汽車で

さあ ひらいて おまえのまたを

ちのはてまでつづく あめのやちまた

だが ちまたには 季節外れの雪が 降っていた

熱帯夜のメコンの夜なのに

恐れ多くも畏くも 狂天慟地の凧上がる

だがたとえ 天地がひっくり返っても

あめつちをつなぐ母なる河として

あなたは 流れつづける

この世の果てまで

地の涯てまでも

この世の果てまで 地の涯てまでも

この世の果てまで 地の涯てまでも！

「いのちのうた」(全員で静かに合唱。次第に盛り上がっていく)

死にゆくもの 生まれいづるもの

ともに刻む いのちのうた

生まれいづるもの 死にゆくもの

ともに歌う いのちのうた

振りかえっても 届かない  
仰ぎ見ても 見わたせない

思い出す ふるさと  
もとはじめの音が ひびく

やさしさ うつくしさ いのりのふかさ

気づかなかったよ 大妣よ  
あなたのいのりと ねがい

やさしさ うつくしさ ねがいのふかさ  
気づかなかったよ 大妣(おおはは)よ  
あなたのいのりとねがい

やさしさ うつくしさ いのりのふかさ  
やさしさ うつくしさ ねがいのふかさ  
やさしさ うつくしさ いのりのふかさ  
やさしさ うつくしさ ねがいのふかさ



い の り  
い の り  
い の り  
い の り

ね が い  
ね が い  
ね が い  
ね が い

い の ち の う た  
い の ち の う た  
い の ち の 遠 さ  
い の ち の 深 さ

執筆者紹介

小泉友美（カトリック神学者、作家）

江尻潔（詩人、足利市立美術館学芸次長）

津城寛文・匡徹（筑波大学名誉教授・宗教学者）

日守麟伍（歌人、本名：津城寛文）

永井敦子（上智大学副学長・フランス文学者）

鶴岡賀雄（東京大学名誉教授・宗教学者）

鎌田東二（京都大学名誉教授・ガン遊詩人）

深澤英隆（一橋大学名誉教授・宗教学者）

勝又公仁彦（京都芸術大学教授・写真家・表紙写真2作品及び短歌）

同人誌 あごら Agora 第1号  
2024年7月7日 ヘルダーリン研究会発行  
編集発行人代表 鎌田東二

